宮城県文化財調査報告書第 112 集

川　崎　町

二　本　松　遺　跡
河　原　田　遺　跡

－国営みちのく杜の湖畔公園関係遺跡発掘調査－

１９８５年

宮　城　県　教　育　委　員　会

建　設　省　東　北　地　方　建　設　局
国営みちのく杜の湖畔公園工事事務所

序

中央に北上・阿武隈等の河川が形成した豊かな平野が広がり，東は大海原の太平洋に面し，西は緑深い奥羽山脈に囲まれた宮城県は，昔から人々の豊かな生活舞台となってきました。

豊かさと潤いが求められている今日，自然と風土，そして，これらに裏打ちされた伝統文化が息づいていることは，地域の宝であります。

私達の祖先の残した貴重な文化遺産が，学問の進歩と人々の理解によって調査解明され，往時の生活文化の復原が可能になりつつあることは，喜ばしいことであります。

地域の発展と文化遺産の保護・保存の調整は，関係者間で綿密な連絡の上実施しているところであり，逐年，各方面からの理解が得られるようになってきました。建設省が計画する各種事業と文化財保護の調整は，特に他の範とするものであります。

本報告書は，国営みちのく杜の湖畔公園建設に当たり，遺跡の範囲と性格を把握するなどの文化財保護上の協議資料を得るために実施した遺跡詳細分布調査と協議の結果永久構造物等の建設予定地に係る二本松遺跡の記録保存の発掘調査の結果をとりまとめたものであります。

この報告書が研究者及び関係者は勿論のこと広く一般の方々に活用され，文化財保護に対する温かい理解が一層深められるよう願ってやみません。

最後に，この調査に深い理解と多大の御協力をいただいた建設省東北地方建設局国営みちのく杜の湖畔公園工事事務所と川崎町の関係者並びに多くの方々に厚く御礼を申しあげます。

昭和60年７月

宮城県教育委員会　教育長

郷　古　康　郎

序

国営みちのく杜の湖畔公園は，増大する東北地方のレクリェーション需要に対応するため，宮城県川崎町の釜房ダム湖畔に計画された全国で10番目の国営公園である。

本公園は，釜房湖の豊かな水，丘陵の緑，蔵王連峰の展望という恵まれた自然環境において「豊かな自然とのふれあいを通じて人間性の回復向上」を図ることを計画の基本理念としている。とくに，当該文化財調査との関係では，本公園が歴史の中で育まれた伝統的文化の伝承の一端を担うものとすることを基本方針のひとつとしており，調査の成果は，公園計画においても興味あるものであった。

また，本公園の整備は，昭和56年の事業採択を経て，現在本格的な整備の前段階にあるが，とくに，今回文化財調査を実施したⅠ期地区（文化と水のゾーン）については，昭和64年の供用開始を目途としていることから，円滑な事業の実施のため早期に文化財調査の完了を図る必要があった。

このたび，宮城県教育委員会の協力により早期に当地区の調査の完了をみることができたことについて，ここに関係者各位に深く感謝の意を表するものである。

なお，今回の調査の結果明らかにされた遺跡等については，公園計画・建設において，その保護・保存に配慮するとともに，文化の伝承という基本方針に即し，公園計画においてその活用等の検討を行っていく所存である。

昭和60年７月

建設省東北地方建設局
国営みちのく杜の湖畔公園工事事務所長

椎　谷　尤　一

例　　言

1. 本書は，国営みちのく杜の湖畔公園建設に伴う二本松遺跡・河原田遺跡・高野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 今回，調査の対象となった高野遺跡は，調査の結果，河原田遺跡に含まれるものと判断し以下，河原田遺跡として記述していく。なお，今回高野遺跡とした地点は，『釜房ダム水没遺跡発掘調査概報』（1970）の「高野遺跡」とは異なるものである。
3. 調査の主体は宮城県教育委員会と建設省東北地方建設局国営みちのく杜の湖畔公園工事事務所である。
4. 発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
5. 本書における土色は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1973）を，土性は国際土壌学会の粒径区分を参照した。
6. 本書第1図は，建設省国土地理院発行の1/25,000地形図「陸前川崎」を複製したものである。
7. 整理・報告書の作成は文化財保護課調査係が行い，「調査に至る経過」を平沢英二郎が，他は小山田正男が担当した。
8. 遺跡の調査・整理に関する記録・出土遺物は，宮城県教育委員会が保管している。

調　査　要　項

遺跡所在地：二本松遺跡・宮城県柴田郡川崎町小野字二本松
　　河原田遺跡・宮城県柴田郡川崎町小野字河原田
遺 跡 記 号：二本松遺跡・ＩＣ（宮城県遺跡地名表登載番号：09042）
　　河原田遺跡・ＩＥ（登載番号：09035）
調 査 期 間：昭和59年９月１日～11月30日
調査対象面積：二本松遺跡　約20,000㎡
　　河原田遺跡　約11,500㎡
発 掘 面 積：二本松遺跡　約 5,800㎡
　　河原田遺跡　約 6,020㎡
調　査　員：平沢英二郎・加藤道男・真山悟・小山田正男・今野隆
公園事務所担当者：及川雄二・柴田敏彦

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境 1
1. 位置と立地 1
2. 周辺の遺跡 3
Ⅲ. 調査の方法と経過 4
Ⅳ. 調査の成果 7
二本松遺跡 7
1. 基本層位 7
2. 発見された遺構と遺物 7
(1) 第１号住居跡と出土遺物 7
(2) 第２号住居跡と出土遺物 27
3. 遺構以外の出土遺物 28
河原田遺跡 31
1. 基本層位 33
2. 出土遺物 33
Ⅴ．考察 35
二本松遺跡 35
1. 第１号住居跡出土遺物の年代と問題点 35
2. 遺構について 38
河原田遺跡 38
1. 河原田遺跡について 38
Ⅵ. まとめ 39
写真図版 42

二本松遺跡

Ⅰ．調査に至る経過

昭和56年度４月，国営釜房湖畔公園（仮称）事業が授択され，同年11月，公園計画と文化財の係り合いについて国営釜房湖畔公園工事事務所（昭和60年４月，国営みちのく杜の湖畔公園事務所と改称）と宮城県教育庁文化財保護課とが協議を行った。

昭和57年３月，文化財保護課は，川崎町教育委員会の協力を得て公園計画地内の遺跡の分布調査を実施した。調査の結果，二本松遺跡をはじめとし第１期工事予定地内に４遺跡，第Ⅱ・第Ⅲ期の工事予定地内には小野城跡など３遺跡が所在することが判った。

昭和57年４月，分布調査の結果を踏まえて関係者間で協議を行い，①計画地内に遺跡が濃密にしかも広範囲に分布するので施設設置の大幅な見直しが必要である。②遺跡への対応は文化財側の現能力から考え昭和58年度は無理であり，昭和59年度以降において調査が可能になる(文化財保護課。)計画の大幅な変更は困難であるが配慮する（建設省）などの意見をかわした。

昭和57年６月28日，再度関係者間で協議を行い，①掘削面積の大幅削減，緑地部分の増加，現状保存部分の増加など計画の見直しを強く要望する。さらに②盛土部分等については遺構確認調査，掘削部分等については記録存在のための発掘調査の実施が必要である。③調査の実施時期は昭和59年度としたい旨の要望を文化財側から出し，建設省から用地等について59年８月まで条件整備をしたいとの意見が出された。

昭和58年11月18日，用地交渉の進捗，工事の内容（盛土及び切土），埋蔵文化財の調査方法について意見の交換を行い，当初予算計上経費等について確認し合った。

昭和59年８月31日，発掘調査について委託契約書を締結し，９月１日から調査に着手した。

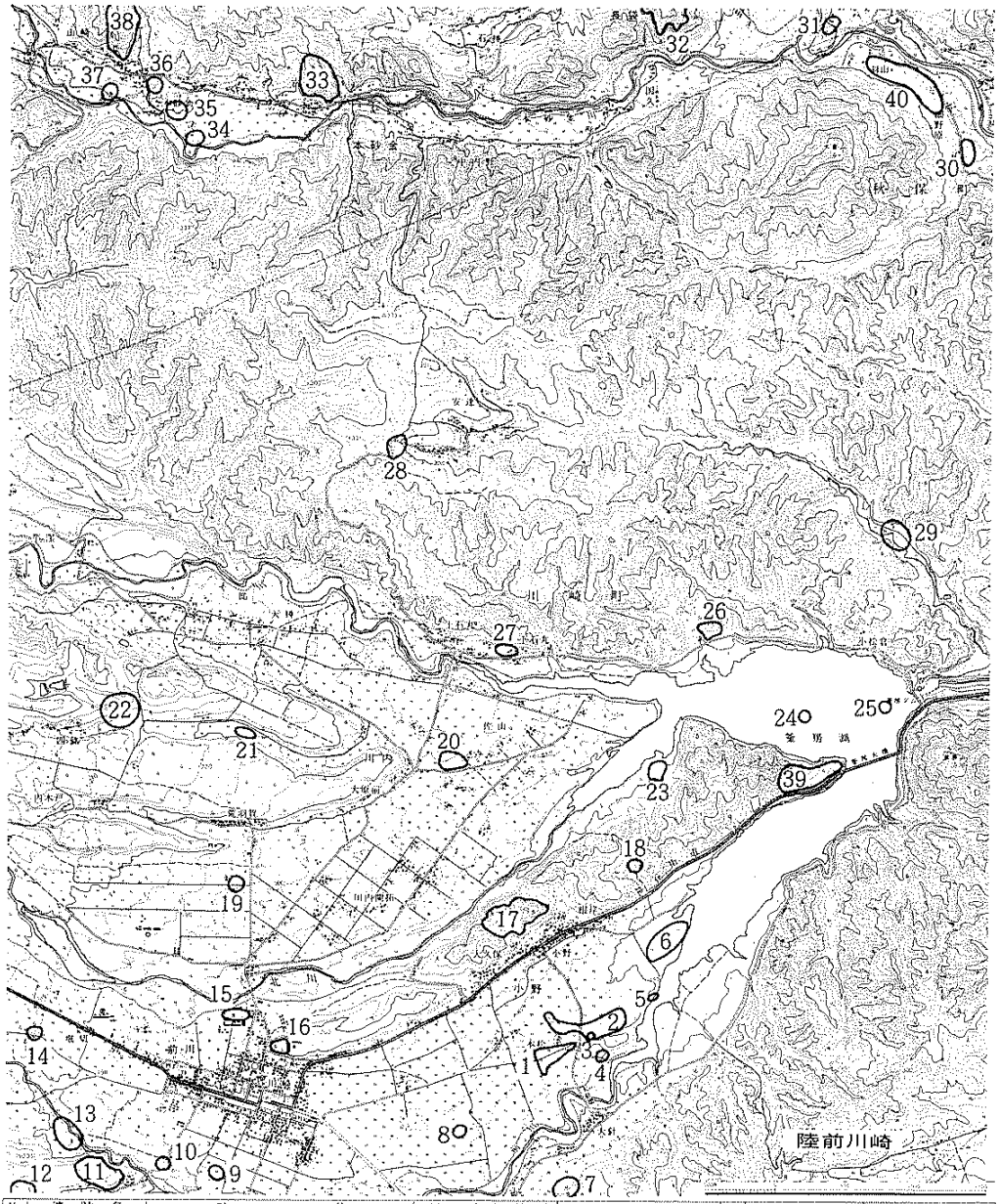
調査の結果，住居跡11軒を確認し，そのうち２軒は記録保存の発掘調査を実施し，その他については協議により盛土下に保存することとして野外調査を終了することになった。

Ⅱ．遺跡の位置と環境

１．位置と立地

二本松遺跡は宮城県柴田郡川崎町小野字二本松，河原田遺跡は同町小野字河原田に所在する。これらの遺跡は川崎町の中心部から東方へ約2.5㎞の地域に位置している。

川崎町は仙台市の西南に位置し，町の西側は標高1，000mを越える山々の蔵王連峰がそびえ，北側は青葉山丘陵，南側は高館丘陵が奥羽山脈から派生して東側にそれぞれ延びている。この南北の丘陵は東側に進むにつれて緩やかに起伏しながら標高が下がり，釜房湖付近で標高300m前後となっている。また，二つの丘陵から張り出す小丘陵によって，釜房山（384.3m）付近



No.	遺跡名	時代							
1	二本松遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	14	四本桜遺跡	弥生（？）	28	安達遺跡	縄文（晩期）
2	河原田遺跡	縄文（前・晩期）・奈良・平安	15	伊勢原遺跡	弥生（後期）	29	黒森山遺跡	縄文
3	河原田古墳	古墳（後期）	16	前川城跡	江戸	30	細ノ原遺跡	縄文
4	下新田古墳	古墳	17	小野城跡	江戸	31	中原遺跡	縄文・古代
5	高野遺跡	縄文（前期）・中世（経塚）	18	愛宕山遺跡	奈良・平安	32	館山城跡	中世
6	下窪遺跡	縄文(早～晩期)・弥生(中期)・奈良・平安	19	荒羽賀遺跡	縄文(前期)・奈良・平安	33	本砂金城館	中世
7	大針遺跡	奈良・平安	20	中沢遺跡	縄文(早～晩期)・弥生	34	野中遺跡	縄文（中期）
8	久保田遺跡		21	丸森中沢A遺跡	縄文（前・晩期）	35	東城跡	中世
9	ガシャッポ遺跡		22	丸森中沢B遺跡	縄文(晩)・弥生・平安	36	山崎遺跡	縄文（中期）
10	本屋敷遺跡	縄文（前・中期）	23	箕作遺跡	奈良・平安	37	上館跡	中世
11	前川本城跡	中世	24	神明遺跡	縄文（中期）	38	西館跡	中世
12	羽根坂山遺跡	縄文（前・中・後期）	25	下原遺跡	縄文（早・中期）	39	荻ノ館跡	中世
13	中の内A遺跡	縄文	26	下石丸遺跡		40	羽山遺跡	縄文・古代
			27	東原遺跡	平安			

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

で狭隘になっている。

このように，町は四方を山で囲まれている。その中を東流する名取川水系の太郎川・北川・前川によって形成された河岸段丘の地域が平野部にあたり，通称川崎盆地と呼ばれている。河岸段丘は４段に区分され，二本松・河原田両遺跡は最低位の段丘より一段高い前川段丘面に立地する（田村：1984）。この前川段丘は，川崎盆地の主体をなす段丘面である。

二本松・河原田両遺跡は前川左岸にあり，二本松遺跡は標高154～156mの段丘南斜面に，河原田遺跡は標高154m前後のほぼ平坦な段丘面にそれぞれ立地する。

これらの遺跡は現在，水田や畑地として利用されている。

２．周辺の遺跡

宮城県遺跡地名表（宮城県教育委員会：1981）によると，川崎町内では71箇所の遺跡が確認されている。これらのほとんどは，太郎川・北上・前川によって形成された段丘や台地に立地し，その中でも前川流域に半数近くの遺跡が集中している。

縄文時代の遺跡は早期から晩期まで存在し，中期・後期の遺跡の割合が高い。本遺跡に近接するものとして，水没遺跡となったが前川の河岸段丘に立地していた下窪・高野の両遺跡がある。特に，下窪遺跡は早期から晩期まで続く遺跡である（後藤：1975）。また，高野遺跡は前期の遺跡であるが遺構は検出されていない。遺構を検出した遺跡としては川内地区の中沢遺跡があり複式炉を持つ住居跡や炉跡が発見されている。中沢遺跡も早期から晩期まで続く遺跡である。

弥生時代の遺跡は少なく，立地する場所も北川・前川の中・下流域に限られている。遺構は検出されていないが，この時期の遺跡として大向・高山官林・中沢・伊勢原・下窪・川村開拓遺跡があり，農耕とのかかわりからも水利のよい場所に集落が形成されていたと考えられる。

古墳時代の遺跡として，河原田古墳・八幡古墳・立野横穴古墳・下新田古墳がある。河原田古墳は河原田遺跡内にあり，段丘の縁辺に立地し古墳の辺りに土師器が散布している。また，八幡古墳は支倉地区，立野横穴古墳は今宿地区にある。下新田古墳は河原田古墳や二本松遺跡と隣接しているが，開墾によって消滅したため詳細は不明である。

奈良・平安時代の遺跡はほぼ町内全域で確認され，遺跡の数も多い。下窪遺跡では縄文時代の遺物の他に，平安時代の竪穴住居跡が検出されている。土師器・須恵器の遺物量は多く，漆器・木器・鉄製品等など遺物の種類も比較的多い。なかでも漆紙が出土し，その後，文字が伴読されている（平川・後藤・白鳥：1980）。県内で集落遺跡から漆紙文書が出土した例として他に小梁川遺跡がある（宮城県教育委員会：1981・82）。

その他，この時期の文献資料である『延喜式』には「小野駅」『倭名類聚抄』には「小野郷」

の名が記載され，また，後世に有耶無耶と呼ばれ，和歌にも歌枕として詠まれるようになった関跡と伝えられている場所もある（亘理：1975）。

中世から近世にかけての遺跡は館跡がほとんどで，他に経塚が一箇所確認されている（志間結城：1970）。館跡は町の北側を流れる本砂金川左岸や平野部周辺の丘陵麓などの交通の要所に立地している。

以上，町内の各時代の遺跡について概観したが，これまでの調査や報告例が少ないため遺跡の性格を十分に把握することはできない。しかし，現時点で観察される資料から川崎町においては，旧石器時代を除き各時代に亘って人々の生活が営まれていたことは確かである。

近年，町内を通る東北横断自動車道関係の分布調査の結果，新たに９つの遺跡が確認され今後の調査によって町の歴史を構成する資料になるものと考えられる。

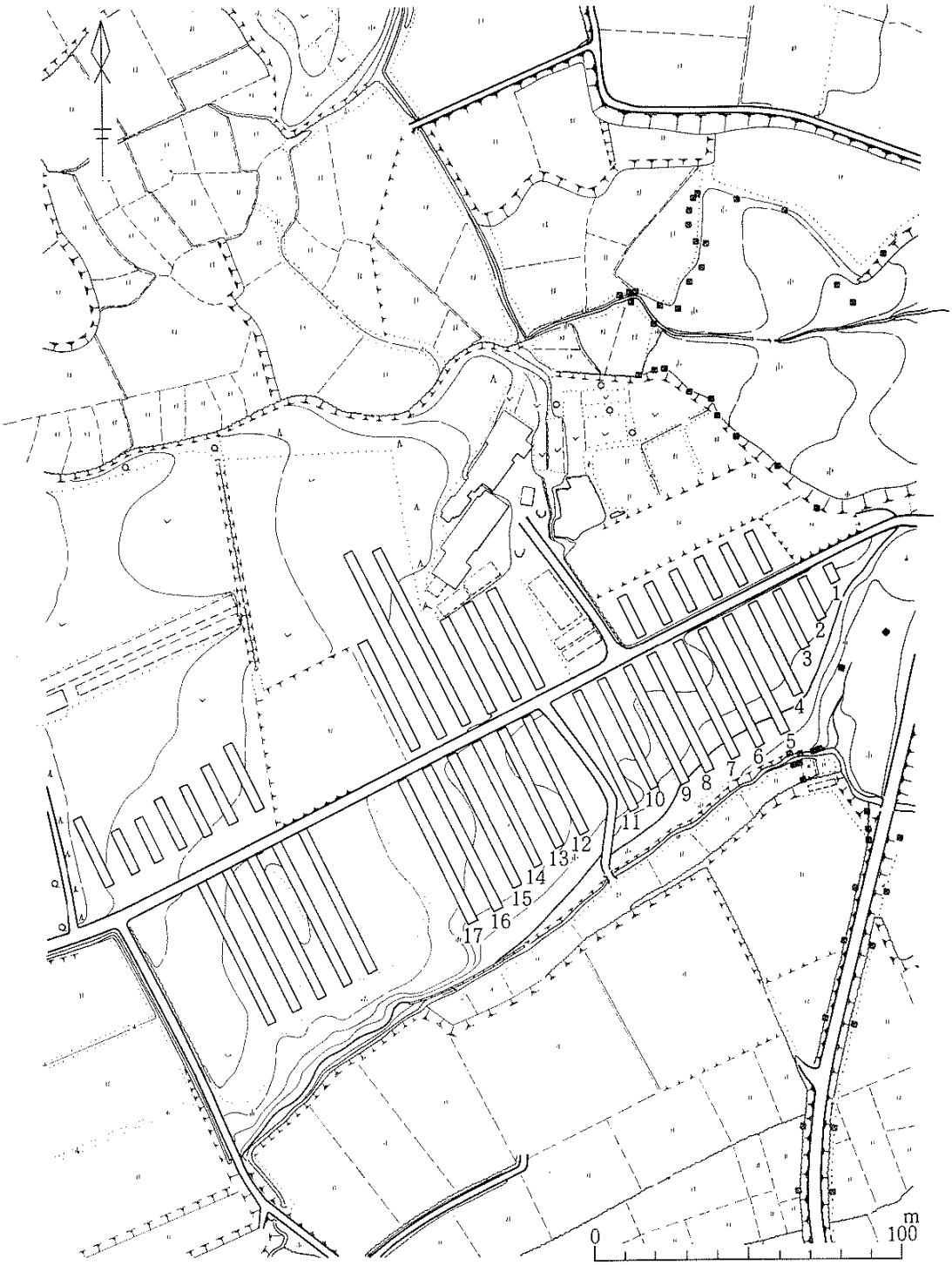
Ⅲ．調査の方法と経過（第２・３図）

調査対象区は，国営みちのく杜の湖畔公園Ⅰ期地区（文化と水のゾーン）とし，９月１日から発掘調査を開始した。

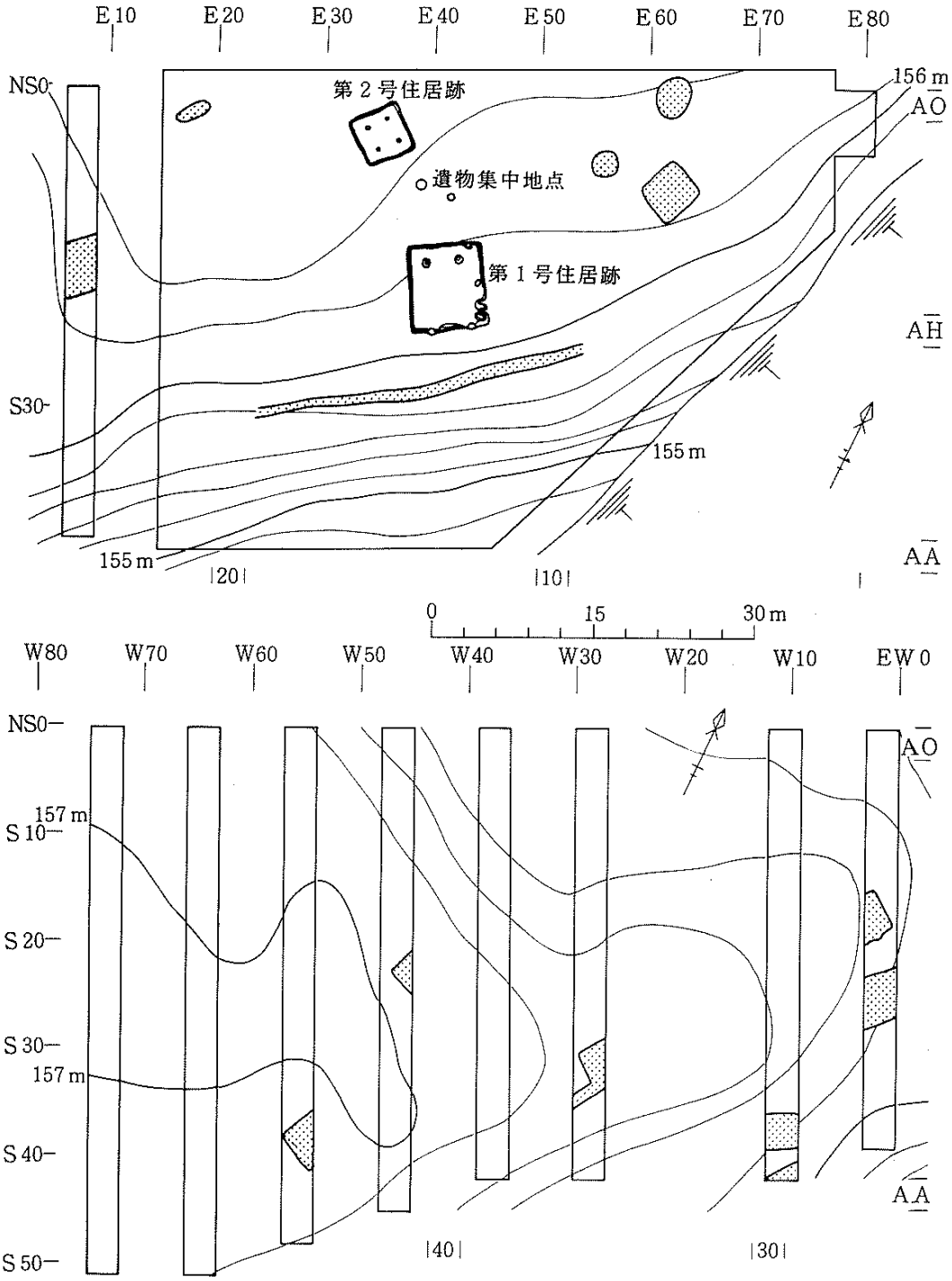
二本松遺跡については地形沿いにほぼ西北方向のトレンチ（3m×６～51m）を６m間隔で設定し，遺構確認を行った。その結果，建物の建設地において竪穴住居跡が検出されたため，№１～№８のトレンチの間の表土を除去し，建物工事の際に避けることのできない２軒の竪穴住居跡の精査を行った。№１～№17 のトレンチの間は一辺３㎝の小グリッドで区画し，グリッド名は東西方向をアラビア教字で，南北方向をアルファベットで示した。

河原田遺跡についてもほぼ南北方向のトレンチ（3m×９～57m）を９～12m間隔で設定し，遺構確認を行った。その結果，遺構は検出されず遺物の出土量も僅少であった。

遺構確認の結果，二本松遺跡では 11 軒の竪穴住居跡とその他，土拡・焼面・溝状遺構等が検出され，そのうち精査した２軒の竪穴住居跡については，1/20 の平面図･断面図作成及び写真撮影，1/300 のグリッド配図へのレベル記入を行い，11 月 30 日に，野外でのすべての調査作業を終了した。



第２図　二本松遺跡グリッド配置図


E10
E20
E30
E40
E50
E60
E70
E80
NS0
S30
156 m
AO
AH
AA
第2号住居跡
遺物集中地点
第1号住居跡
155 m
155 m
|20|
|10|
0
15
30 m
W80
W70
W60
W50
W40
W30
W20
W10
EW0
NS0
S10
S20
S30
S40
S50
157 m
157 m
|40|
|30|

第3図　遺構配図

Ⅳ 調 査 の 成 果

二本松遺跡

1．基本層位

第１層は黒褐色の耕作土である。第２層はローム漸移層で部分的に確認され，第３層は黄褐色のローム層（地山）である。

トレンチ№１～№17の調査区内は，中央部付近がやや高く，その微高はほぼ東西方向にあらわれている。第１層の厚さは約50ｃｍである。中央部の北側は窪地になり南側に向って傾斜している。また，南側端部では礫層がみられる。

遺構はすべて調査区中央部付近の微高地の地山面で検出された。

2．発見された遺構と遺物

（1）第１号住居跡（第４図）

〔位置〕ＡＨ～ＡＪ－12～14区

〔平面形・規模〕南北約8.4m，東西約6.8mの長方形である。

〔壁〕地山を壁としている。ほぼ垂直に立ち上がり，残存している壁高は北壁で約30㎝，他は約20㎝である。

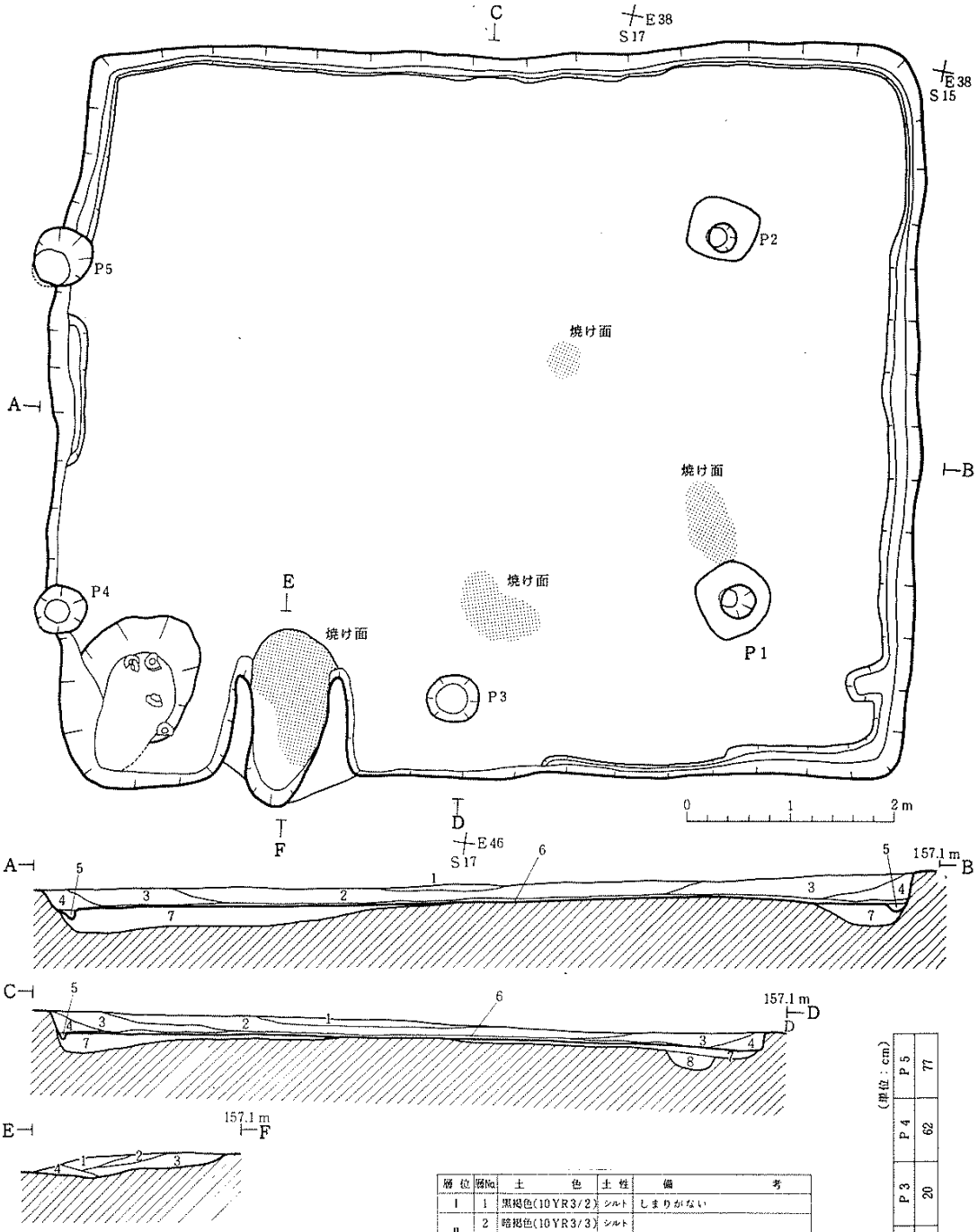
〔床面〕住居跡中央部は地山を床面とし，縁辺は掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦で全体的に堅くしまっている。また，焼面が３箇所確認され，床面上からは多量の遺物と炭化材が検出された。

〔横穴〕ピットは床面から４個（P1･2･3･4）検出された。その中で柱痕跡を確認できたのは，P1とP2である。この４個のピットを結ぶ線はほぼ長方形となり，配置のあり方からも柱穴と考えられる。柱間は南北が約6.4m，東西が約3.4mとなる。

〔周溝〕東辺の南半分と南辺の東半分を除いて壁際を巡っている。幅は約15～20㎝，深さは約５～10㎝である。

〔カマド〕東壁の南隅近くに付設されている。燃焼部の側壁が残存し，煙道部は検出されなかった。燃焼部の規模は幅約70㎝，奥行き約170㎝である。側壁は粘土で構築されている。焼面は燃焼部内全体にみられる。カマド内からの出土遺物は少なく，土師器坏の破片と土師器小形甕が１点出土しているだけである。

〔貯蔵穴状ピット〕カマドの右脇，住居跡南東隅にある。北側の立ち上がり明確でないが，長軸約1.6m，短軸約1.1mの楕円形である。断面は皿状で南側の壁は住居壁と連続している。堆積土は，木炭と焼土を多量に含んでいる。また，底面から土師器坏が３個体重なって出土し，



層No.	土色	土性	備考
カマド 1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	住居内堆積土第3層
カマド 2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	カマド崩壊土
カマド 3	黄褐色(10YR5/6)	シルト	カマド崩壊土，焼土を多量に含む
カマド 4	褐色(10YR4/4)	シルト	住居内堆積土第4層

層位	層No.	土色	土性	備考
Ⅰ	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	しまりがない
Ⅱ	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
	3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	やや粘性あり。地山粒を含む
Ⅲ	4	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土・炭化物を多量に含む
	5	褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒を含む
Ⅳ	6	褐色(10YR4/6)	シルト	粘性あり
掘り方埋土	7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	粘土質の地山ブロックを多量に含む
ピット3	8	暗褐色(10YR3/4)	シルト	

(単位：cm)

P5	77
P4	62
P3	20
P2	57
P1	66

第4図　第1号住居跡

他に土師器甕が２点，須恵器坏が１点，甕が１点出土している。

〔堆積土〕住居跡内堆積土は４層に大別される。第１層は住居跡中央部でレンズ状に堆積している。第２層は住居内の縁辺を除き全体を覆っている。第３層は周溝及び壁際に堆積し，焼土と炭化物を多量に含んでいる。第４層は床面から約２㎝，生活の間に堆積した層で最終的な床面はこの上面である。直上からは多量の炭化物・炭化材が検出されている。また，住居跡の北西部からは炭化米が出土している。

第１層から第３層までは，壁際から流れ込むような堆積状況を示している。

〔出土遺物〕遺物は床面・カマド・貯蔵穴状ピット・Ｐ３・４掘り方埋土・堆積土から，土師器赤焼土器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品・その他，僅かではあるが，弥生土器が出土している。

このうち図化できたものは，土師器坏23点，高台付坏１点，甕５点，赤焼土器９点，小形皿１点，須恵器坏13点，高台付坏２点，壺４点，瓶１点，甕10点，灰釉陶器埦１点，鉄製品11点である。

土師器

坏・高台付坏・甕が出土している。

坏（第５図・６図）

すべて製作にロクロを使用している。器形は体部が緩やかな丸味をもって立ち上がり，口縁部で外反するもの(第５図1～4・6)とほぼ直線的なもの(第5図5・7～12・第6図)とに分かれる。底部の切り離しは回転糸切りのもの(第5図3・4・7・9～11・第６図2～4・6・8・10～12)とヘラケズリによって不明なもの(第５図1・2・5・8・12・第６図1・5・7・9)とがある。

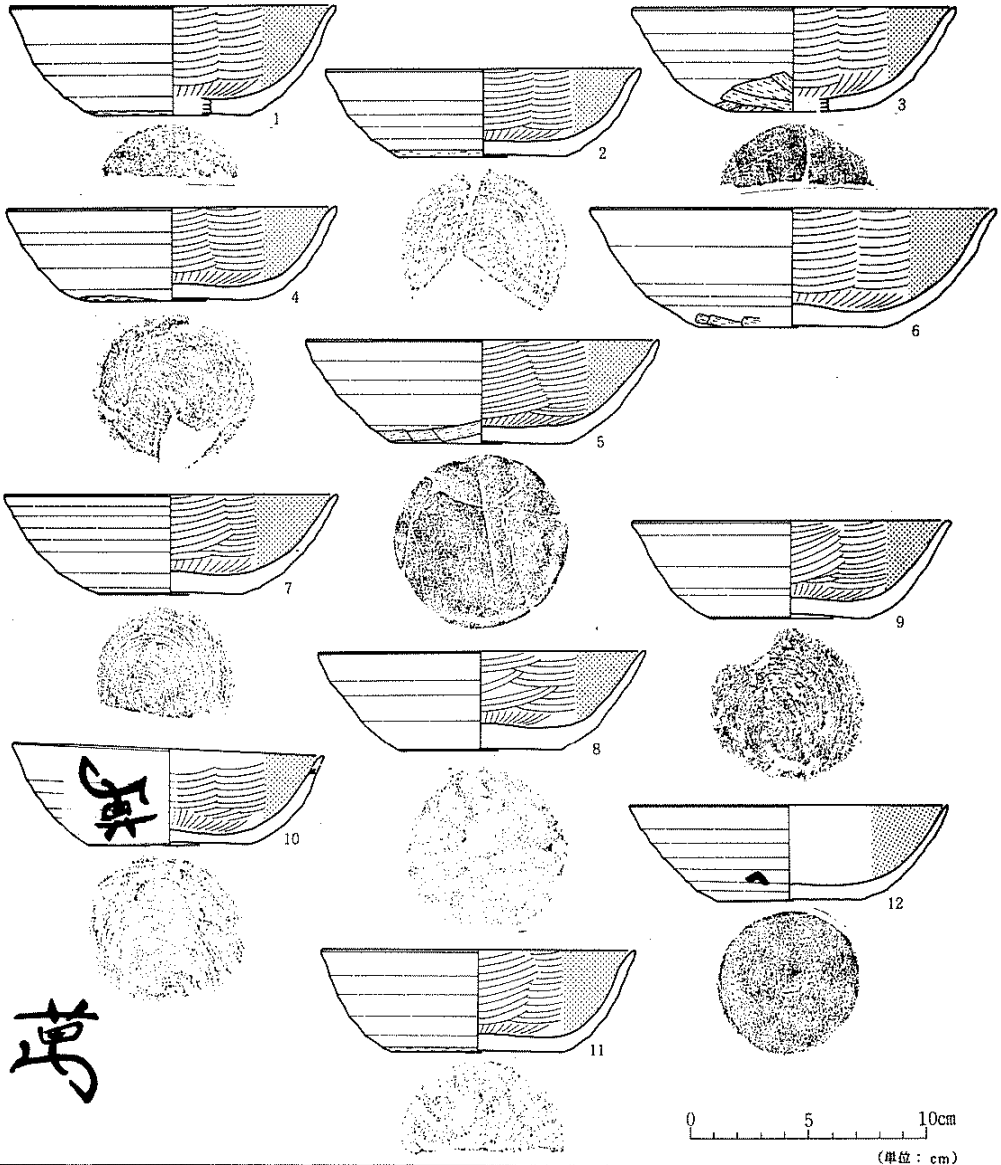
外面には体部下端・底部周縁・底部全面に回転または手持ちヘラケズリの再調整が施されているもの(第5図1～6・8・11・12・第6図1・2・5・7～9)と，再調整のないもの(第5図7・9・10・第6図3・4・6・11・12)とがある。内面にはすべてヘラミガキ・黒色処理が施されている。色調は黄褐色や褐灰色である。

高台付坏（第６図６）

体部下端は丸味を持ち，体部はほぼ直線的に立ち上がり，口縁部でやや外反する。底部の切り離しは回転糸切りで，底部周縁には低い高台を貼り付けた際のナデがみられる。内面には，ヘラミガキ・黒色処理が施されている。

甕（第９図４～８）

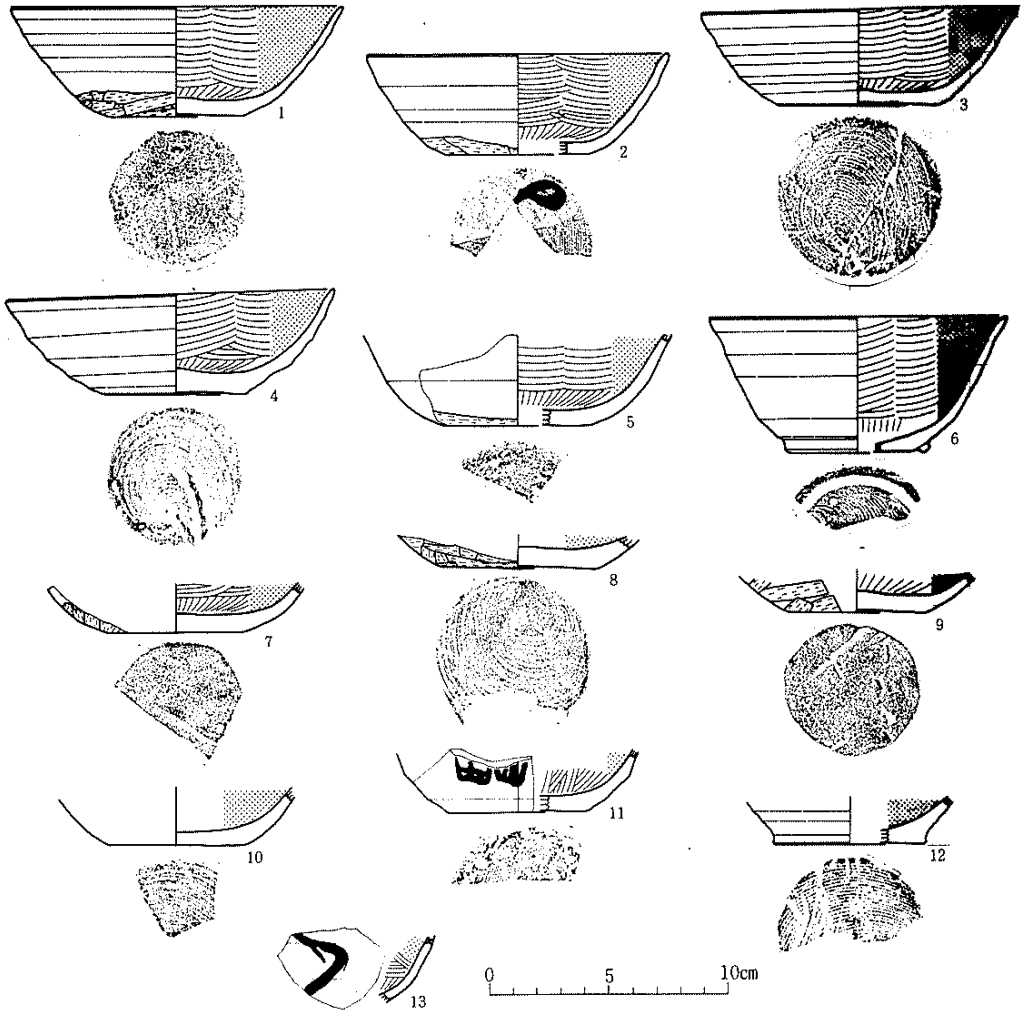
製作にロクロを使用しているもの(4・5・7・8)と，使用していないもの６がある。(4・5)は，体部がやや丸味を持って立ち上がり，口縁部が外反する小形甕である。４は，底部を欠くもので，体部に再調整は施されていない。５は，底部の切り離しが回転糸切りで，再調整は内外面とも摩滅のため不明である。７は，体部がほぼ直線的に立ち上がり口縁部で外反する長胴形のもの



（単位：cm）

No.	器種	層位	外面	内面	口径	底径	器高	登録No.
1	土師器 坏	床	ロクロナデ，体部～底部・回転ヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理	(13.6)	(6.4)	4.6	1住－1
2	〃 〃	〃	ロクロナデ，体部～底部・回転ヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理	(13.1)	7.0	3.7	1住－2
3	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り→体部～底部・手持ちヘラケズリ，墨書有り	ヘラミガキ，黒色処理	(13.4)	(6.8)	4.4	1住－3
4	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り→体部～底部周縁・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理	(13.6)	6.4	3.9	1住－4
5	〃 〃	〃	ロクロナデ，体部～底部・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理	14.6	7.4	4.4	1住－5
6	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り，体部～底部周縁，手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理	(16.9)	(7.8)	5.0	1住－6
7	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ヘラミガキ，黒色処理	(14.0)	7.0	4.2	1住－7
8	〃 〃	貯蔵穴P	ロクロナデ，底部・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理	13.6	6.6	4.2	1住－8
9	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ヘラミガキ，黒色処理	(13.2)	6.5	4.1	1住－9
10	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り，体部に「萬」の墨書	ヘラミガキ，黒色処理	(13.2)	6.6	4.4	1住－10
11	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り→体部～底部周縁・回転ヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理	(13.1)	(7.0)	4.3	1住－11
12	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・手持ちヘラケズリ，体部・墨書有り	ミガキ不明，黒色処理	13.3	6.0	4.1	1住－12

第5図　第1号住居跡出土遺物(1)



（単位：cm）

No	器種	層位	外面	内面	口径	底径	器高	登録No
1	土師器 坏	3 層	ロクロナデ，底部全面，体部下端・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理	13.8	5.6	4.6	1住－27
2	〃 〃	2 層	ロクロナデ，底部・回転糸切り，墨書有り，体部・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理	12.6	(5.8)	4.2	1住－26
3	〃 〃	3 層	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ヘラミガキ，黒色処理	13.0	6.6	4.2	1住－28
4	〃 〃	掘り方埋土	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ヘラミガキ，黒色処理	13.5	5.8	4.4	1住－30
5	〃 〃	床	ロクロナデ，底部～体部・回転ヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理	(12.6)	(5.8)	(3.9)	1住－20
6	〃 高台付坏	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ヘラミガキ，黒色処理	12.2	(5.6)	5.7	1住－13
7	〃 坏	掘り方埋土	ロクロナデ，底部全面・体部・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理		(5.6)		1住－31
8	〃 〃	2 層	ロクロナデ，底部・回転糸切り，底部～体部・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理		(6.4)		1住－29
9	〃 〃	3 層	ロクロナデ，底部全面，体部・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理		5.6		1住－24
10	〃 〃	床	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ミガキ不明，黒色処理		(5.6)		1住－22
11	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り，墨書有り	ヘラミガキ，黒色処理		(5.8)		1住－19
12	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ミガキ不明，黒色処理		(6.2)		1住－21
13	〃 〃	〃	ロクロナデ，墨書有り	ヘラミガキ，黒色処理				1住－23

第6図　第1号住居跡出土遺物(2)

である。体部外面には手持ちヘラケズリ，内面にはヘラナデが施されている。８は体部がほぼ直線的に立ち上がり，口縁部が外反する小形のもので，内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。土師器甕は，他の器種に比べ出土量が極めて少ない。６は底部破片資料で，内外面に刷毛目，底部内面にヘラナデが施され底面に木葉痕が認められるものである。

赤焼土器

坏・小形皿が出土している。

坏（第７図１～９）

体部がほぼ直線的に外傾するものである。底部の切り離しはすべて回転糸切りで，再調整のないもの(1～4･6･7･9)と，底部周縁にナデが施されているもの(5･8)がある。また(5.8)の底部はつくり出し高台の形をなしている。また，内面にヘラミガミが施されているもの（1･3･5･8）もあるが，土師器坏に比べ粗雑で部分的にロクロ目が認められる。黒色処理は施されていない。胎土は土師器坏に比べ均質・堅緻で，色調は橙色・明赤褐色である。

小形皿（第７図10）

体部がほぼ直線的に開き，口縁端部でふくらみを持つ。底部と体部との段差は，やや下方で切り離した結果と考えられる。底部の切り離しは回転糸切りで，再調整はない。全体的に摩滅している。

須恵器

坏・高台付坏・壺・瓶・甕が出土している。

坏（第８図・第９図１～３）

底部の切り離しはすべて回転糸切りで，再調整のないものである。器形は，体部がやや丸味を持つて立ち上がるもの(第8図1･3～5･7･11･12･第9図1)と，ほぼ直線的に外傾するもの(第8図2･6･8･9･第9図2)とがある。また，口縁部は外反するもの（第８図1～7･9･12･第９図1･2）と，直線的なもの(第8図8･11)があり，前者では口縁端部がふくらみをもつ場合が多い。

高台付坏（第８図10・第９図３）

いずれも，器形は体部が丸味を持って立ち上がるもので，坏に比べ器高が高い。底部の切り離しは回転糸切りで，再調整のないものである。高台は低く，断面が三角形をなしている。

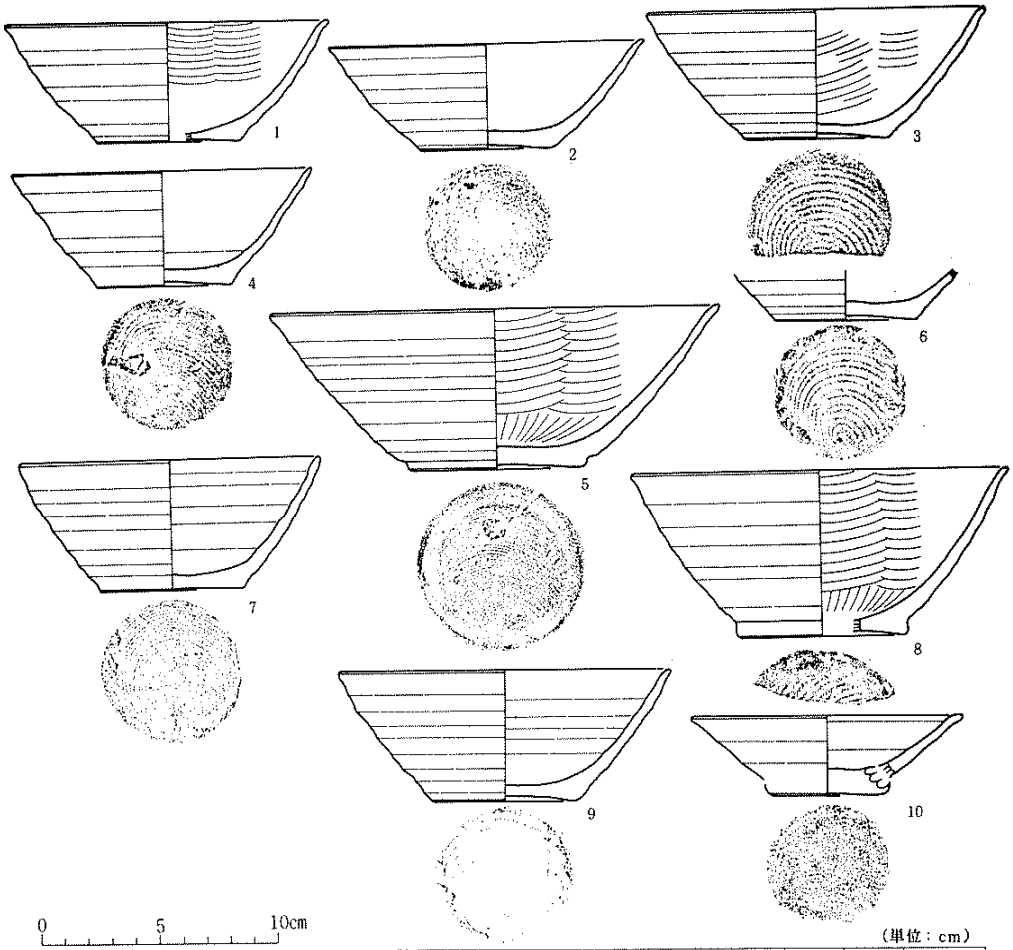
壺（第10図・第11図１）

第10図１は，体部がほぼ直線的に外傾し，肩が張るものである。口頸部は直線約に外傾し，口縁端部で外反する。底部には「ハ」字状の高台が付き，底面にヘラケズリ・ナデが施されている。口縁部には自然釉がかかっている。

第10図２は，口頸部を欠く資料であるが，体部は全体的に丸味を持っている。底部には断面が三角形の高台が貼りつけられている。また，外面は底部から体部上半まで回転ヘラケズリが

施されている。自然釉が部分的にみられる。

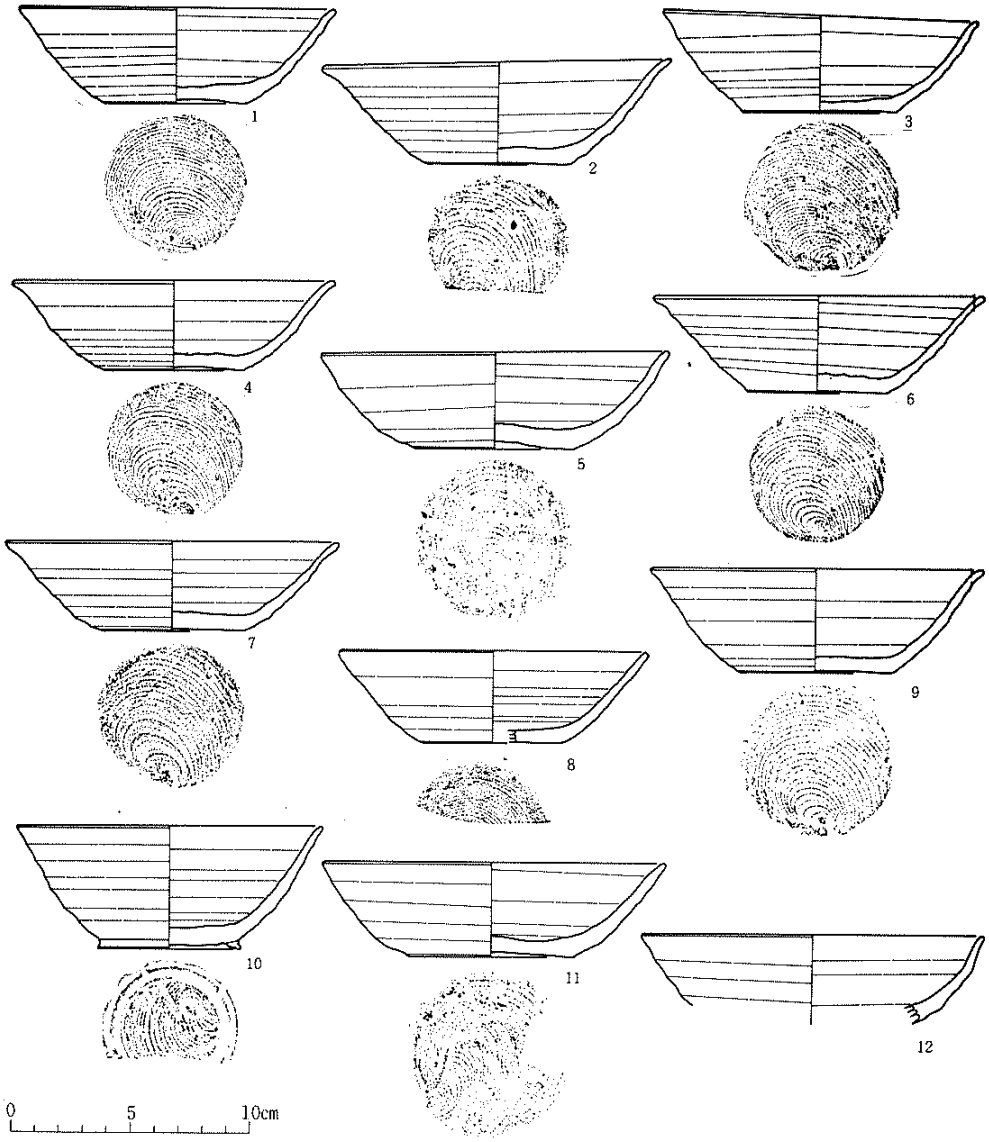
第10図３は，体部がほぼ直線的に外傾し，体部上半で丸味を持つて屈曲し，この屈曲する部分と頸部にそれぞれ一本の隆帯が貼り付けられている。口頭部は直線的に外傾し，口縁部で強く外反する。また，口縁端部には１条の沈線がみられ，下方につまみ出されている。底部には，



（単位：cm）

No.	器種	層位	外面	内面	口径	底径	器高	登録No.
1	赤焼土器 坏	床	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ヘラミガキ	13.4	(6.0)	5.0	1住－14
2	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	摩滅	13.0	5.4	4.5	1住－16
3	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ヘラミガキ	14.0	6.0	5.4	1住－15
4	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	12.6	5.6	4.8	1住－33
5	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り，周縁・ナデ	ヘラミガキ	18.5	7.0	6.7	1住－17
6	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	摩滅		5.8		1住－25
7	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	12.6	6.0	5.5	1住－32
8	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り，周縁・ナデ	ヘラミガキ	15.6	(6.8)	7.0	1住－18
9	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	13.8	5.8	5.5	1住－34
10	〃 小形皿	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	11.4	4.4	(3.3)	1住－35

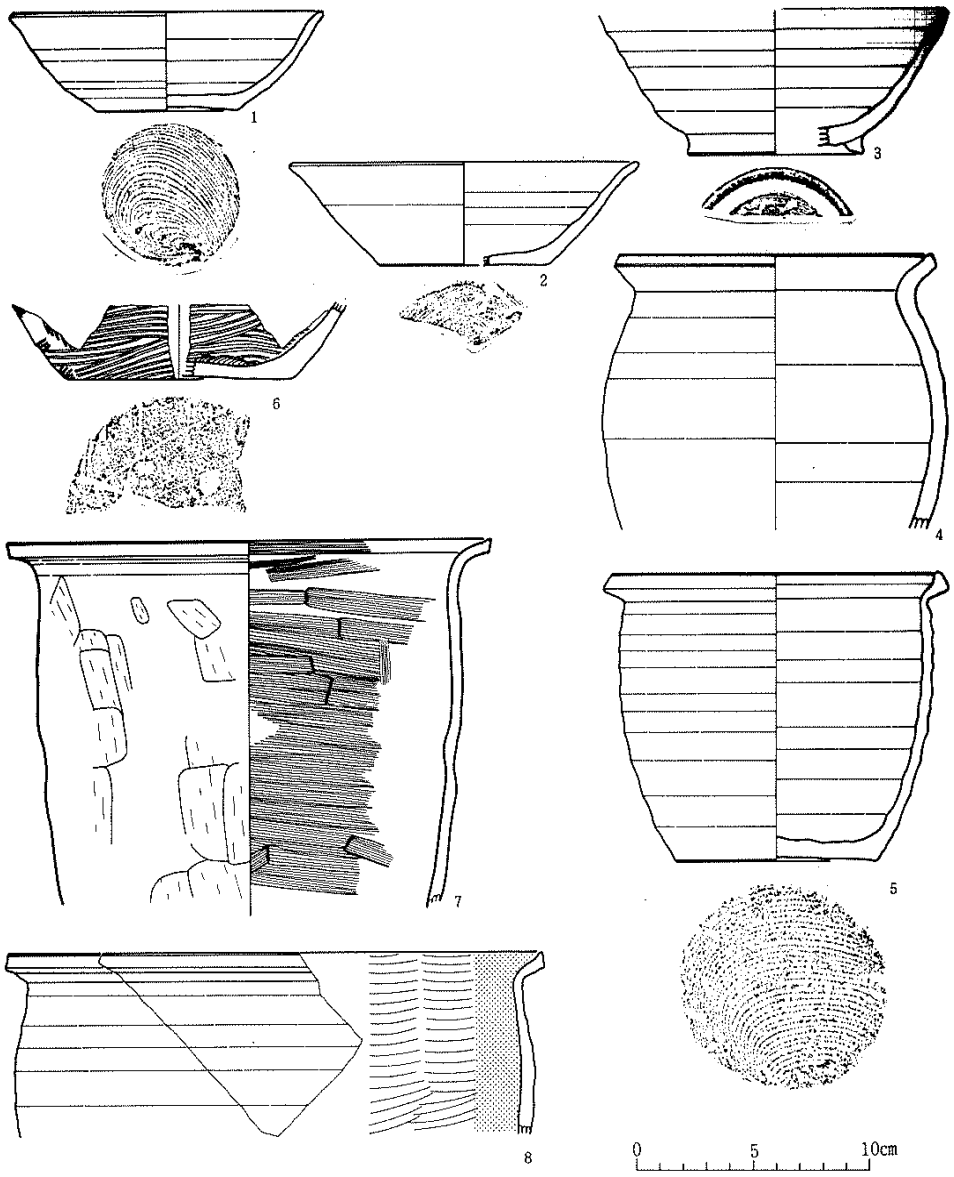
第７図　第１号住居跡出土遺物(3)



（単位：cm）

No.	器種	層位	内面	外面	口径	底径	器高	登録No.
1	須恵器 坏	床	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	13.2	6.0	4.1	1住－36
2	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	14.6	6.0	4.5	1住－37
3	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	13.0	6.4	4.3	1住－38
4	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	(13.6)	5.8	3.8	1住－39
5	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	14.3	6.6	4.2	1住－40
6	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	(13.8)	5.8	4.2	1住－41
7	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	(14.0)	5.8	3.8	1住－42
8	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	(12.8)	(6.0)	3.9	1住－43
9	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	(14.0)	6.4	4.4	1住－44
10	〃 高台付坏	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	(12.7)	5.9	5.2	1住－45
11	〃 坏	貯蔵穴P	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	14.2	6.9	4.1	1住－46
12	〃 〃	1・2層	ロクロナデ	ロクロナデ	14.2			1住－47

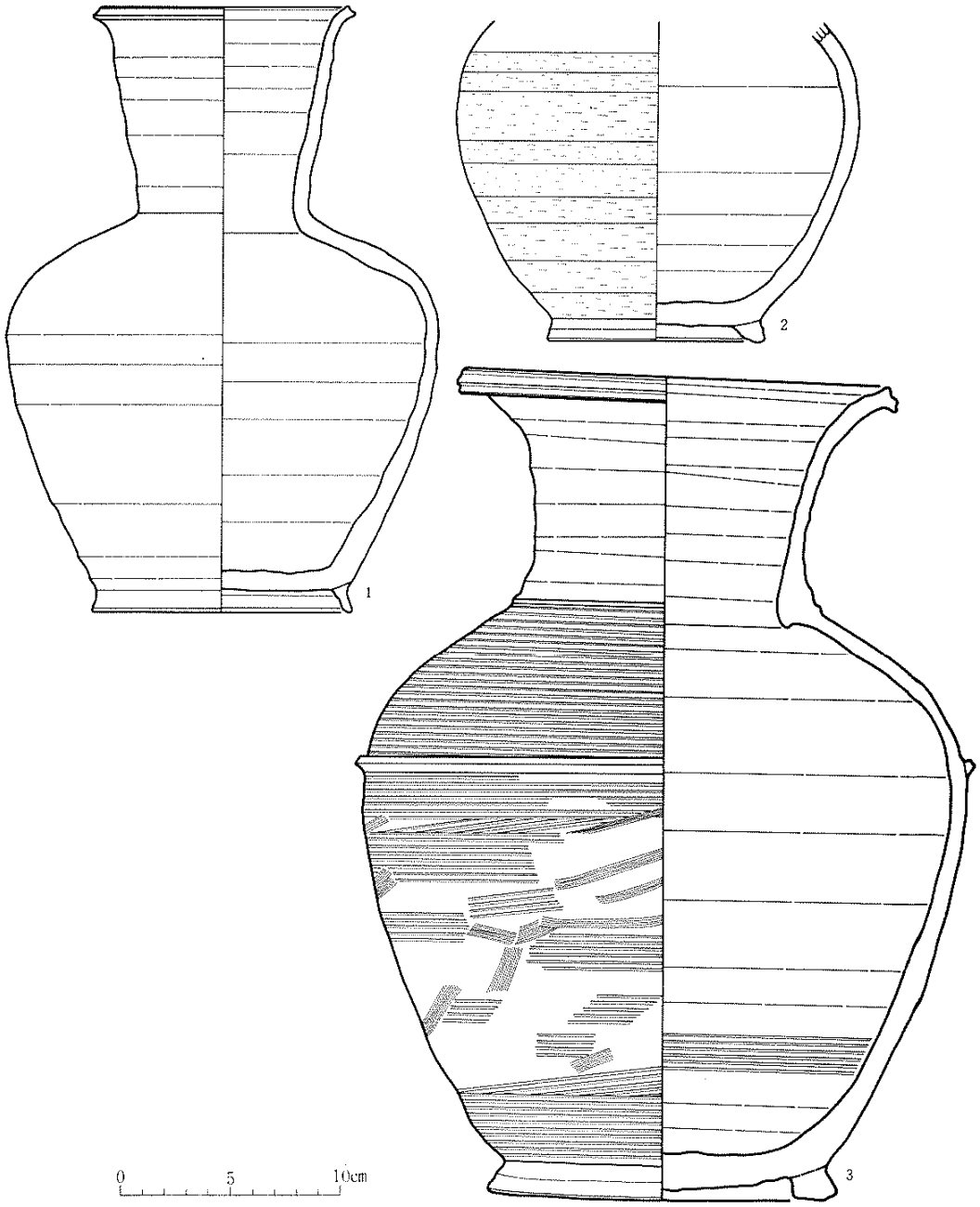
第8図　第1号住居跡出土遺物(4)



（単位：cm）

No.	器種	層位	外面	内面	口径	底径	器高	登録No.
1	須恵器 坏	4 層	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	(13.2)	6.0	4.2	1住－48
2	〃 〃	掘り方埋土	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	(14.6)	(7.2)	4.3	1住－49
3	〃高台付坏	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り，ナデ	ロクロナデ		(7.2)		1住－50
4	土師器 甕	貯蔵穴P	ロクロナデ	ロクロナデ	13.4			1住－51
5	〃 〃	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り	ロクロナデ	(14.0)	8.6	12.3	1住－52
6	〃 〃	掘り方埋土	刷毛目，底部，木葉痕	刷毛目，ヘラナデ		(9.6)		1住－53
7	〃 〃	〃	ロクロナデ，体部・ヘラケズリ	横ナデ，ヘラナデ	(20.6)			1住－54
8	〃 〃	ピット3	ロクロナデ	ヘラミガキ，黒色処理				1住－55

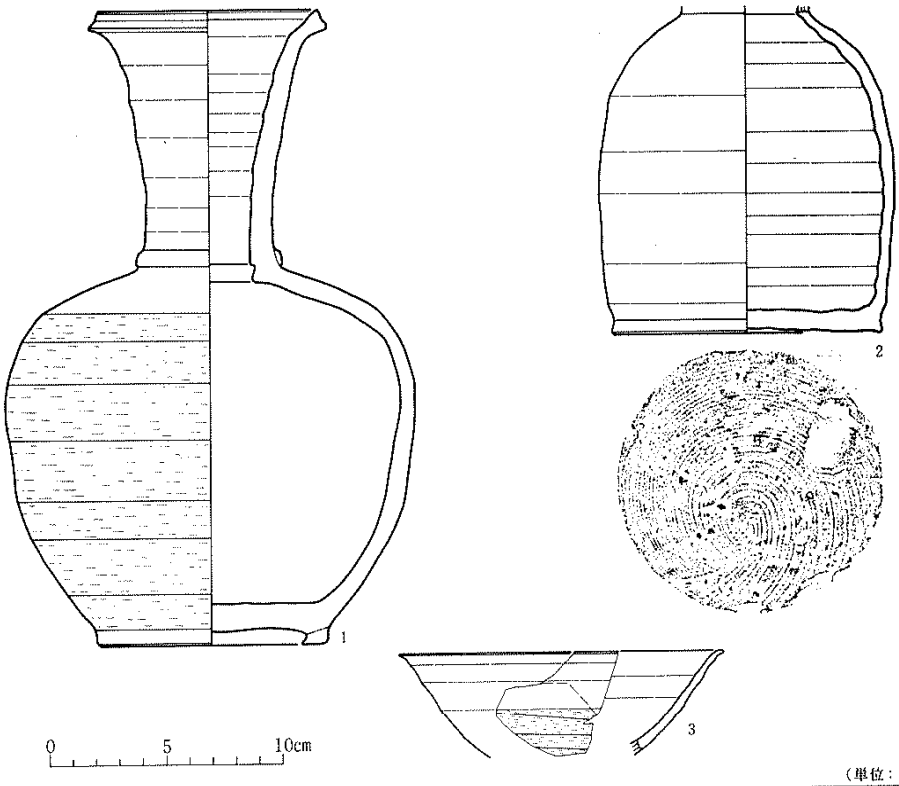
第9図　第1号住居跡出土遺物(5)



（単位：cm）

No.	器種	層位	外面	内面	口径	底径	器高	登録No.
1	須恵器 長頸壺	床	ロクロナデ，底部・ヘラケズリ，ナデ，自然釉	ロクロナデ	(11.0)	11.5	27.3	1住－56
2	〃 〃	〃	ロクロナデ，回転ヘラケズリ，自然釉	ロクロナデ		(9.4)		1住－57
3	〃 〃	〃	ロクロナデ，体部・回転刷毛目，ヘラナデ	ロクロナデ，体部・回転刷毛目	19.1	15.3	37.0	1住－58

第10図　第1号住居跡出土遺物(6)



（単位：cm）

No.	器種	層位	外面	内面	口径	底径	器高	登録No.
1	須恵器 壺	床	ロクロナデ，底部・回転ヘラケズリ，自然釉	ロクロナデ	9.4	9.6	27.1	1住－71
2	〃 瓶	〃	ロクロナデ，底部・回転糸切り，自然釉	ロクロナデ		11.4		1住－59
3	灰釉陶器 埦	〃	ロクロナデ，体部・回転ヘラケズリ，口縁部・釉	ロクロナデ，釉				1住－70

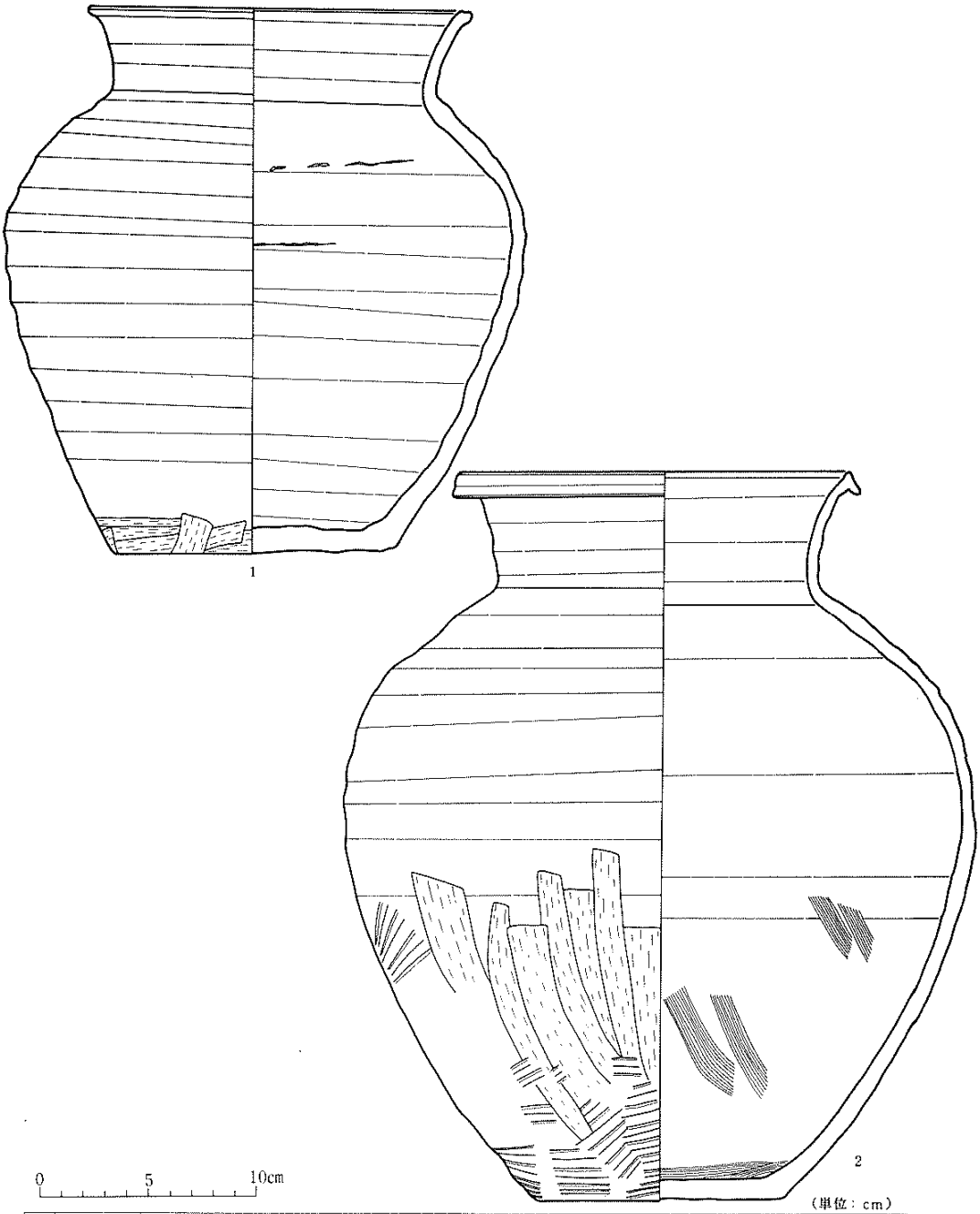
第11図　第１号住居跡出土遺物(7)

断面が台形の高台が貼り付けられ，底面にナデが施されている。外面には，体部に貼り付けられた隆帯の下方で部分的に回転刷毛目が施され，ヘラナデもみられる。隆帯の上方では下方に比べ丁寧な回転刷毛目が頸部まで施されている。内面の体部下半にも一部に回転刷毛目が施されている。

第11図１の体部はやや丸味を持って立ち上がり，体部上半で緩やかに屈曲する。口頸部は直線的に外傾し，口縁端部で外反する。また，内外面には体部と口頸部を接合する際の段がみられる。底部には，外側がほぼ垂直で，内側が内部に張り出す形をなす高台が貼り付けられている。体部外面と底面には，回転ヘラケズリが施され，底部周縁にはナデがみられるが，体部の内面は剥落のため不明である。口縁部から体部にかけて暗灰色の自然釉がかかり，胎土は黒色の微粒石を含み堅緻である。色調は淡灰色である。

瓶（第11図２）

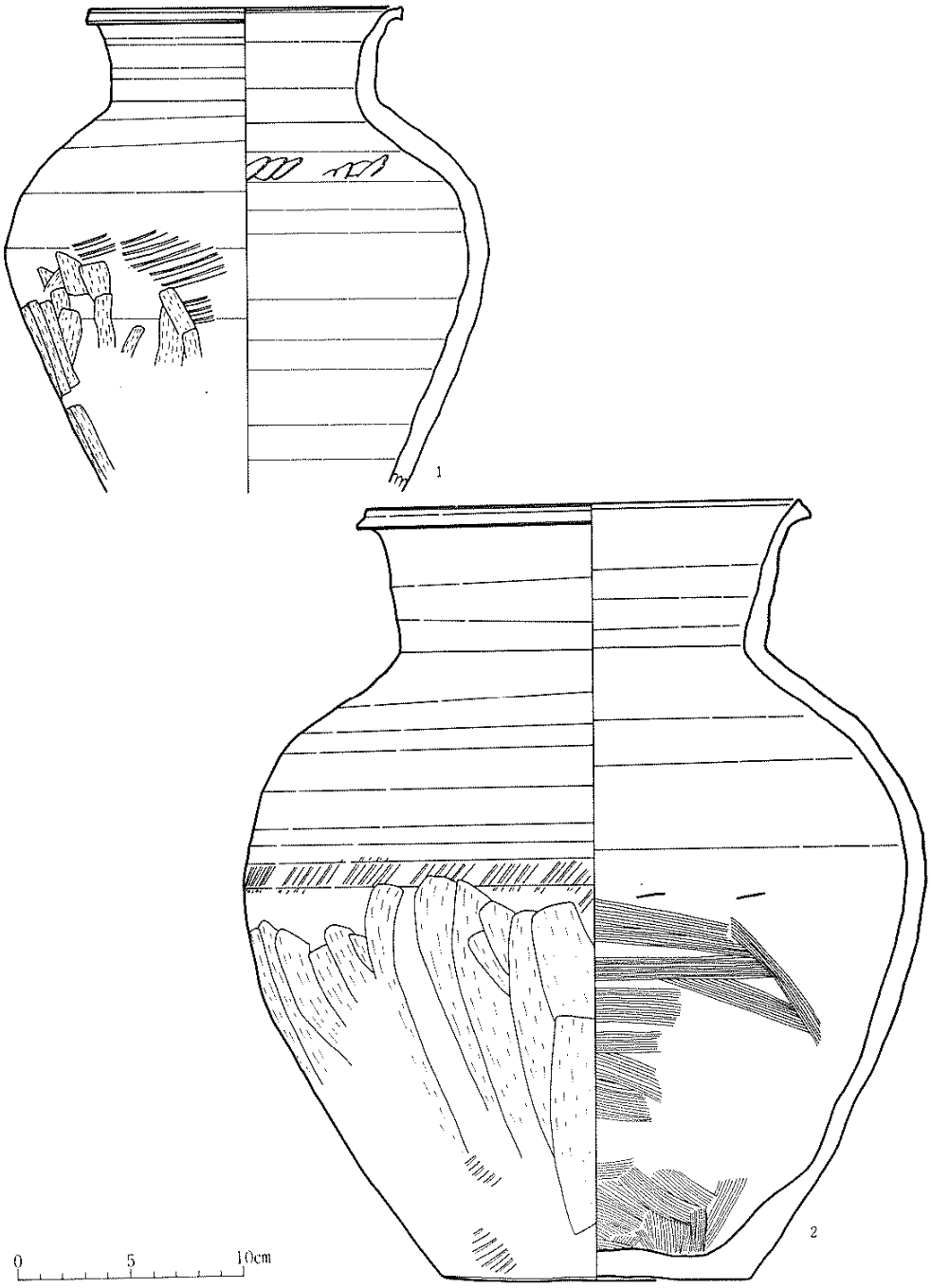
口頸部を欠き，底部からほぼ垂直に立ち上がり，体部上半ですぼむものであるが，口頸部は



（単位：cm）

No.	器　種	層位	外　　面	内　　面	口径	底径	器高	登録No.
1	須恵器　甕	床	ロクロナデ，体部ヘラケズリ，底部布痕	ロクロナデ	16.9	12.6	25.3	1住－60
2	〃　〃	〃	ロクロナデ，体部・平行タタキ→ヘラケズリ	ロクロナデ，体部ヘラナデ	17.9	11. 2	33.8	1住－61

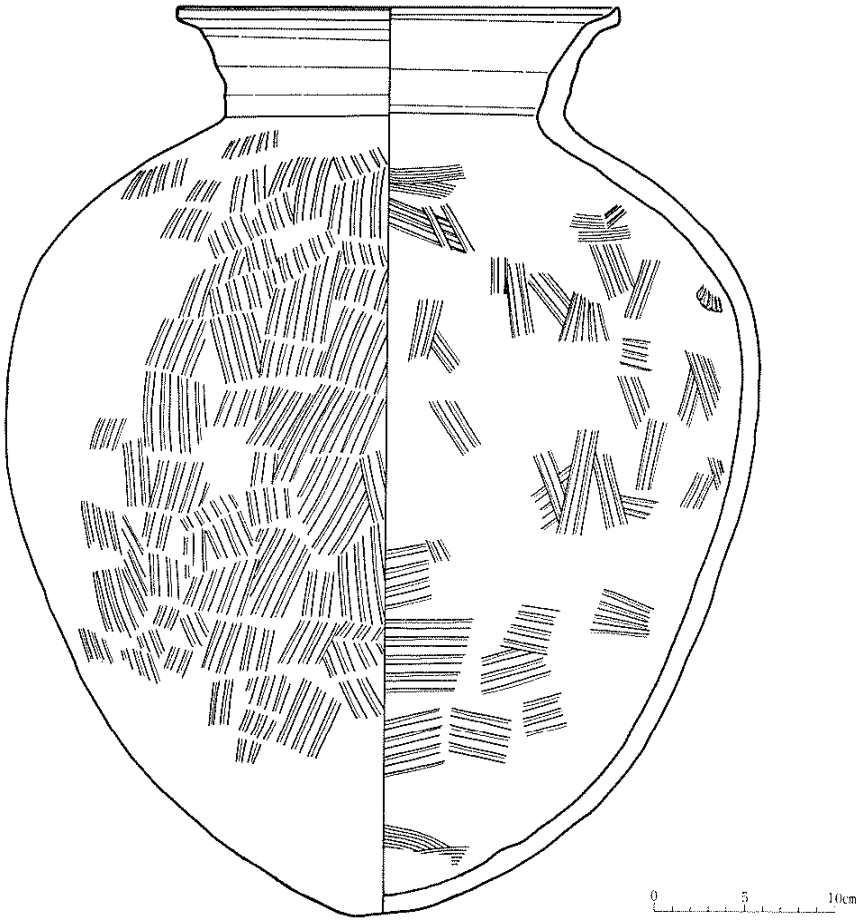
第12図　第1号住居跡出土遺物(8)



（単位：cm）

No.	器種	層位	外面	内面	口径	底径	器高	登録No.
1	須恵器	甕	床	ロクロナデ，体部・平行タタキ，ヘラケズリ	ロクロナデ，オサエ	13.7		1住－62
2	〃	〃	〃	ロクロナデ，体部・平行タタキ，ヘラケズリ	ロクロナデ，体部ヘラナデ	19.1	13.5	34.5	1住－63

第13図　第1号住居跡出土遺物(9)



器　種	層位	外　　面	内　　面	登録No.
須恵器　甕	床	口縁～頸部・ロクロナデ，体部・平行タタキ	口縁～頸部・ロクロナデ，体部・平行オサエ→ハラナデ	1住-64

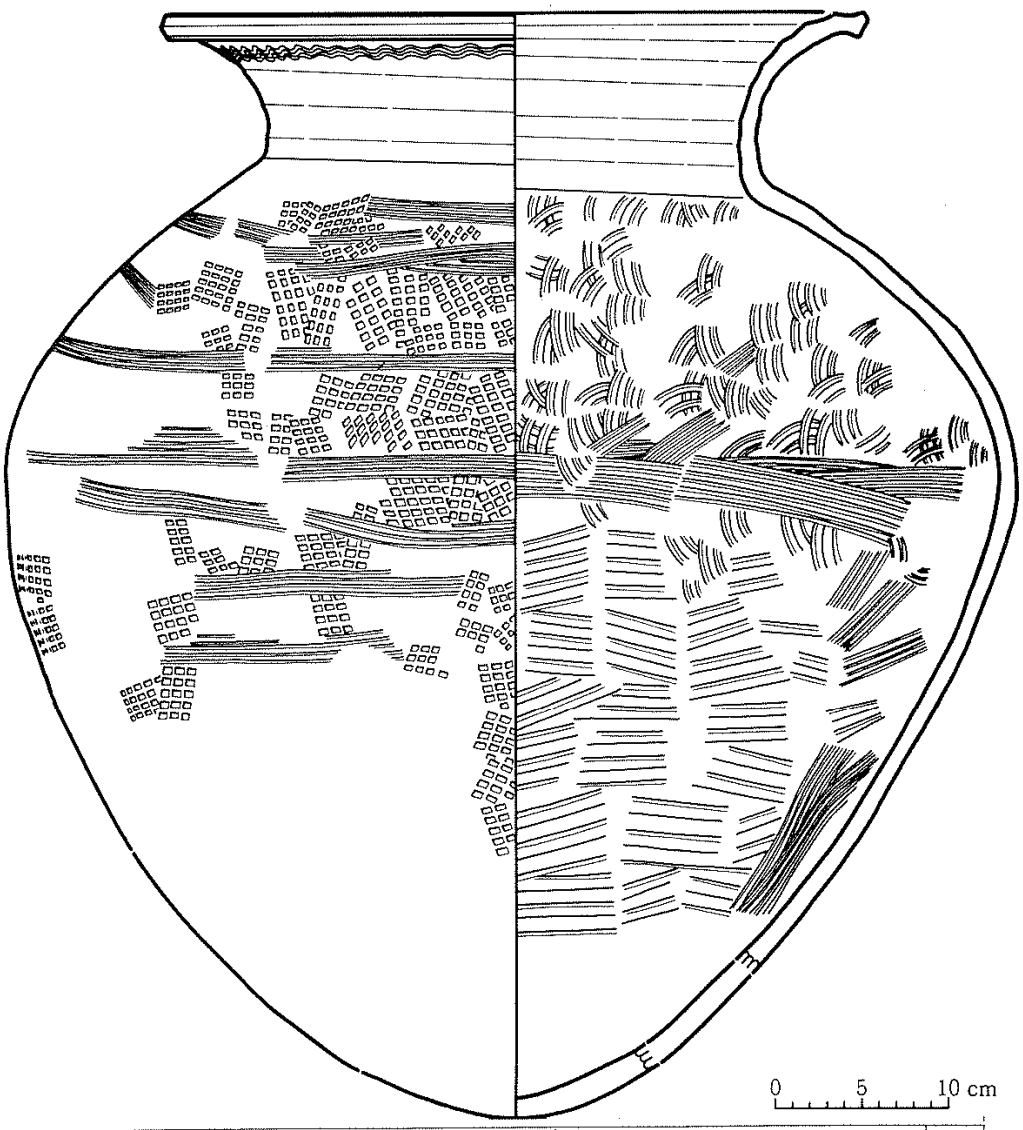
第14図　第１号住居跡出土遺物(10)

短く外傾すると考えられる。底部の切り離しは回転糸切りで，内外面ともに再調整はない。体部上半に緑色の自然釉がかかり，胎土は堅緻で色調は灰色である。

甕（第12～19図）

小形のものと大形のものとがある。前者は，全体をロクロで製作している。後者は，口頸部はロクロ目が残り，体部はタタキ・ヘラケズリ等が施され，ロクロ目は不明である。

小形のものの体部は，緩やかに外傾して立ち上がり体部上半で屈曲する。頸部はやや外傾し口縁部で外反する。口縁端部は下方につまみ出されるもの(第12図2･第13図1･2)，とふくらみをもつもの（第12図１）とがある。底部はすべて平底であり第12図１の底部には調整の際の布痕がある。また，外面には第12図１の体部にヘラケズリ，第13図２と第13図１・２の体部に平行タタキとヘラケズリが施され，内面では，第12図２・第13図２の体部にヘラナ

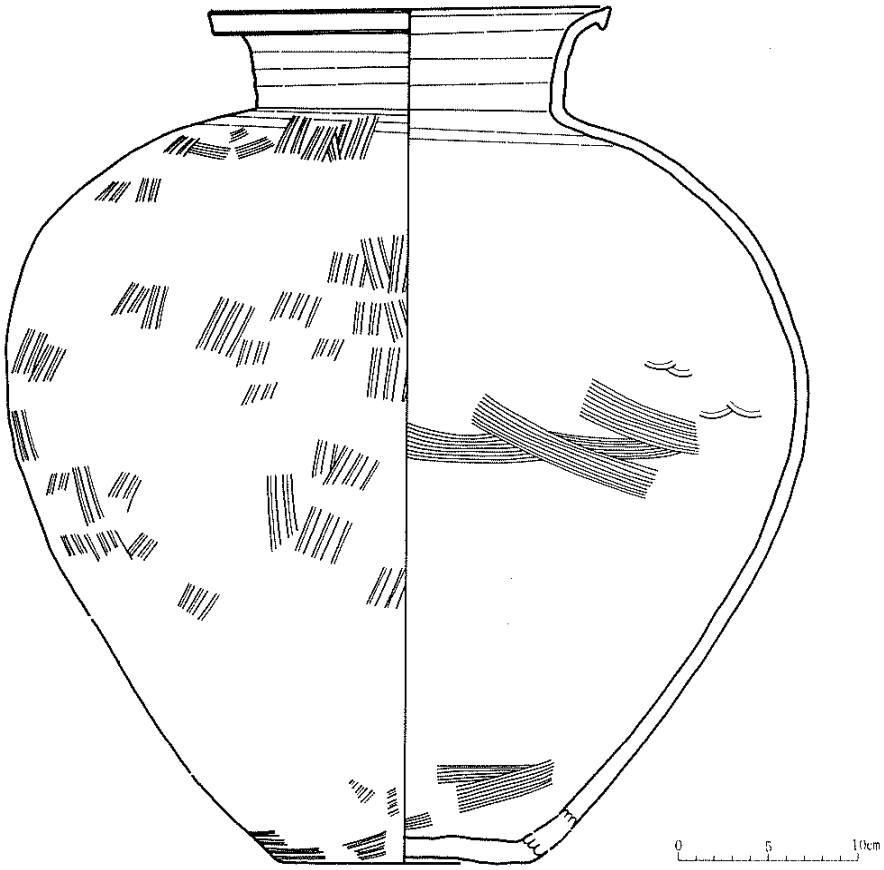


器種	層位	外面	内面	登録No.
須恵器 甕	床	口縁～頸部ロクロナデ，櫛描波状文，体部格子タタキ→刷毛目	口縁～頸部ロクロナデ，体部平行オサエ，青海波状文，刷毛目	1住－65

第15図　第1号住居跡出土遺物(11)

デ，第13図1の体部上半にオサエがみられる。第13図2の底部には，ナデが施されている。他は不明である。

大形のものの体部は，丸味を持って立ち上がり，体部上半が緩やかに屈曲するもの(第14･15･16図)，肩が張り出すもの(第17･18･19図)がある。底部は丸底(第14･15･17･18図)と平底(第16･19図)のものがある。第16図の頸部は，ほぼ垂直に立ち上がるが，他は外傾し口縁部はすべて外反



器　種	層位	外　　面	内　　面	登録No.
須恵器 甕	床	口縁～頸部ロクロナデ，体部・平行タタキ	口縁～頸部ロクロナデ，体部・青海波状文，ヘラナデ	1住－66

第16図　第１号住居跡出土遺物(12)

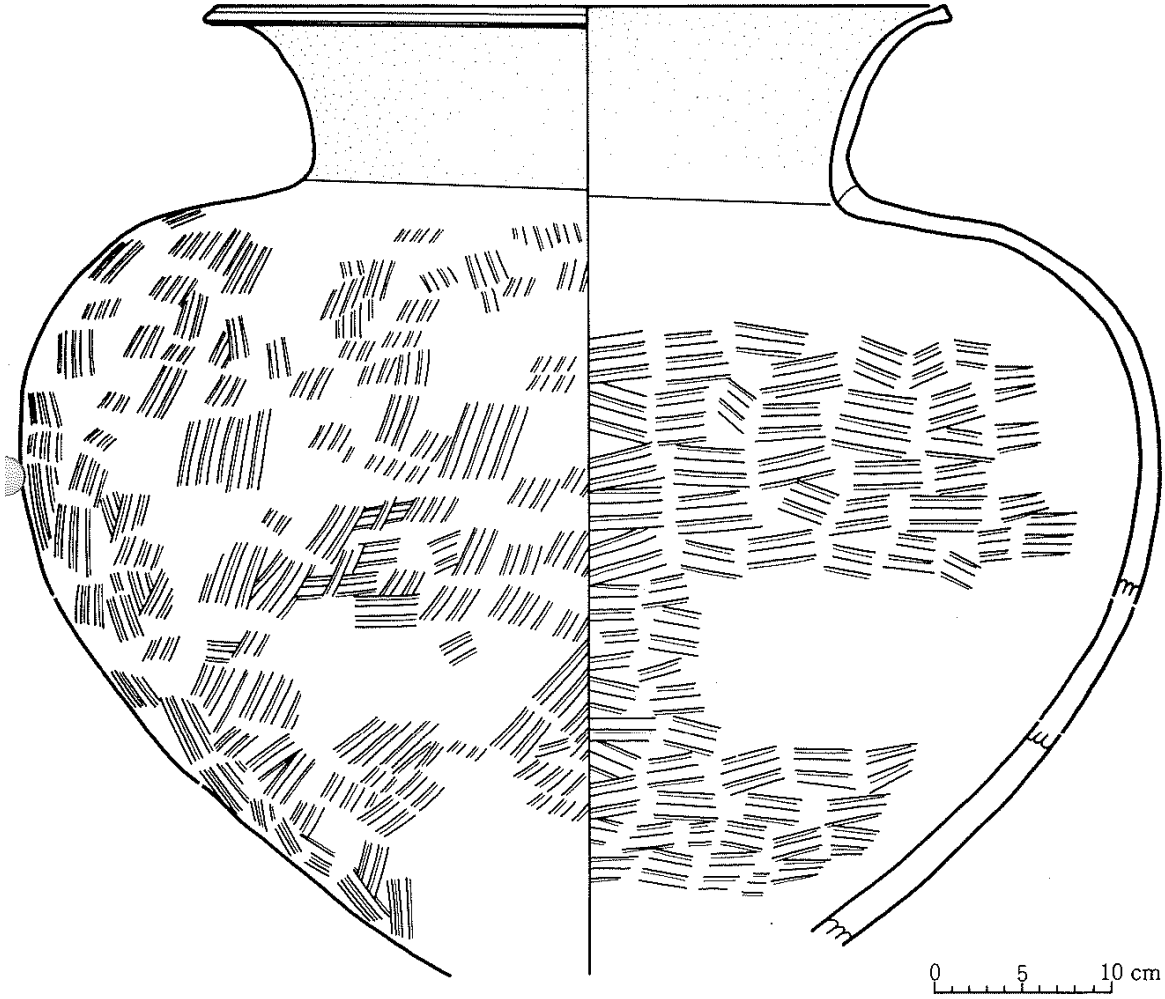
している。また，口縁端部は上方や下方につまみ出されている。第15図の口頸部の外面には，櫛描波状文が施されている。第15図の体部では，格子状タタキの後刷毛目，第18図の体部はヘラケズリが施され，他は，平行タタキが施されている。また，第18図と第19図には，丁寧なナデが施されている。内面は，第14図平行のオサエの後ヘラナデ，第15図は，平行と青海波状のオサエの後刷毛目，第16図は，青海波状のオサエの後ヘラナデ，第17図は，平行のオサエ，第18図は，斜格子と放射状のオサエが施されている。

灰釉陶器

埦が出土している。

埦（第11図３）

口縁部から体部までの破片資料である。体部は丸味をもって外傾すると思われる。口縁端部は横方向につまみ出され外反する。また，体部下半に回転ヘラケズリが認められる。施釉方法



器　種	層位	外　面	内　面	登録No.
須恵器　甕	床	平行タタキ，口縁～頸部剥落	平行オサエ，口縁～体部剥落	1住－67

第17図　第1号住居跡出土遺物(13)

は不明であるが，淡緑色の釉が内面では全体に，外面では口縁部付近に施されている。

鉄製品

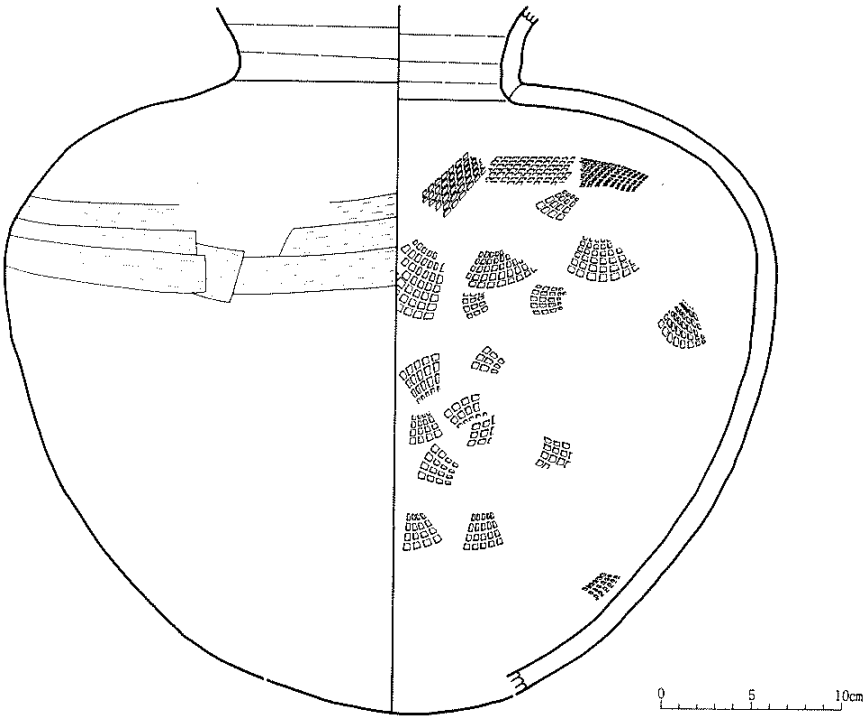
刀子・小刀・鞘臀・釘等が出土している。

刀子（第19図2）

平棟・平造で先端部と身の一部が欠損している。両関で茎に木質部が残存している。

小刀（第19図1）

平棟・平造で切先が欠損しているが，刀身はやや反るものである。片関で茎はほぼ残存している。茎の断面は長方形である。



器種	層位	外面	内面	登録No.
須恵器 甕	床	口縁～頸部ロクロナデ，体部・ヘラケズリ，ナデ	口縁～頸部ロクロナデ，格子オサエ（斜・放射状）	1住－68

第18図　第１号住居跡出土遺物(14)

鞘脣（第19図８）

第19図１の小刀の鞘脣と考えられ，一部欠損しているが全体の形は四角形になると考えられる。断面は「U」字状である。他に９と10は８と同様の形をしているため，鞘脣に使用されたものと思われる。

釘（第19図３～７）

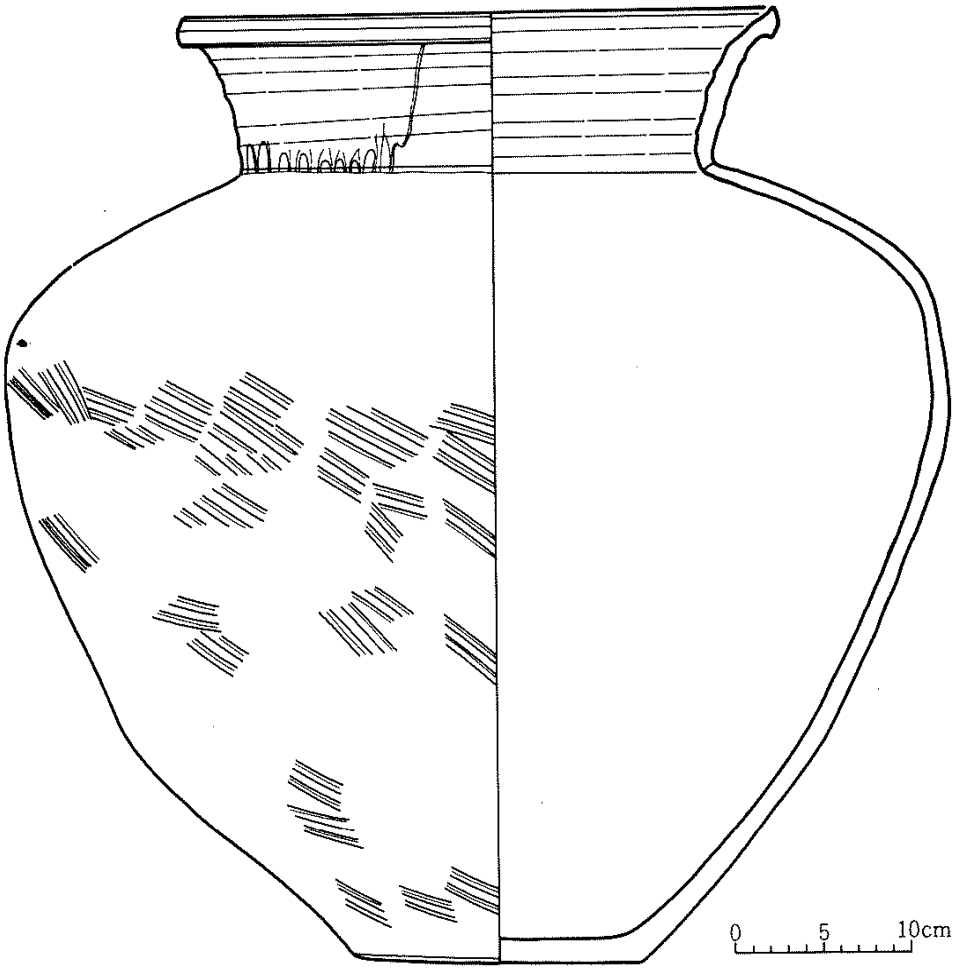
完形品はない。断面は四角形である。

その他の鉄製品（第19図11）

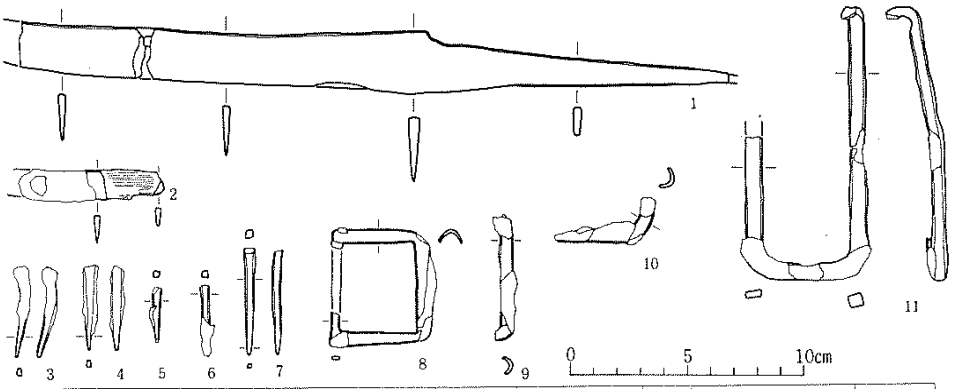
11は性格が平明なもので，同類の鉄製品が栗原郡築館町佐内屋敷第９号住居跡（森：1983）から出土している。

弥生土器（第20図）

１は口縁部，２は頸部，他はすべて胴部資料である。１は複合口縁をなし，下端に刺突文が横位にめぐる。刺突文の上方には横位のＲＬ縄文が施文され，刺突文の下方と内面には横位のナデが施されている。他も，内外面に横位のナデ，外面に横位のＲＬ(2･4)またはＬＲの縄文(3･5)が施されている。これらの特徴は天王山式（伊東：1957）に比定されるものである。



器　種	層　位	外　面	内　面	登録No.
須恵器　甕	貯蔵穴P	口縁～頸部ロクロナデ，体部・平行タタキ，自然釉	口縁～頸部ロクロナデ，体部ナデ	1住－69

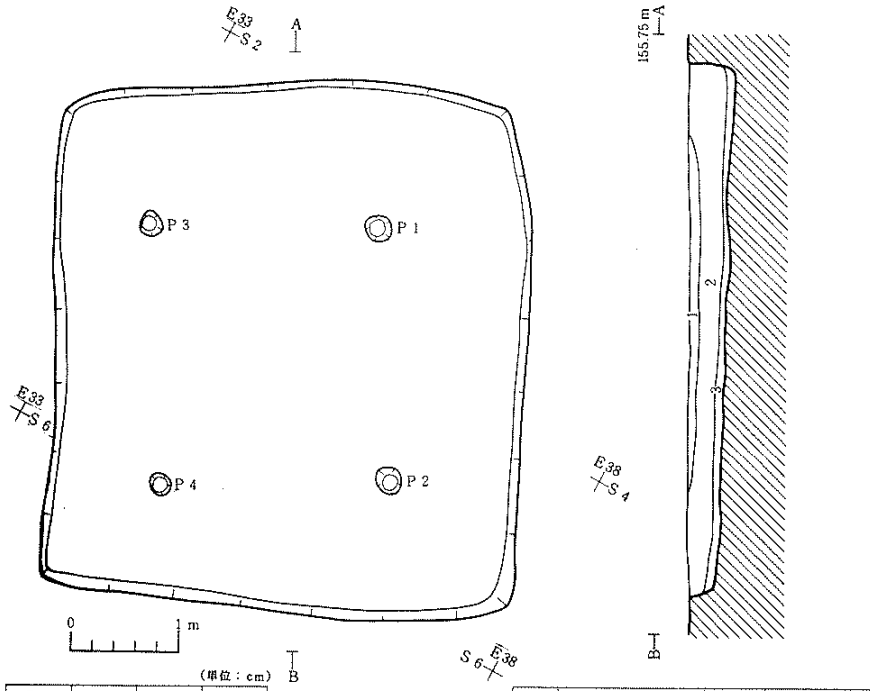


No.	器　種	層位	特　徴	登録番号	6	鉄　釘	床面		1住－77
1	鉄製・小刀	床面	平棟・平造，片関	1住－72	7	鉄　釘	床面		1住－78
2	鉄製・刀子	床面	平棟・平造，両関で茎に木質部残存	1住－73	8	鉄製・鞘帽	床面		1住－79
3	鉄　釘	3層		1住－74	9	鉄製不明品	床面	鞘帽？	1住－80
4	鉄　釘	床面		1住－75	10	鉄製不明品	床面	鞘帽？	1住－81
5	鉄　釘	床面		1住－76	11	鉄製不明品	床面		1住－82

第19図　第1号住居跡出土遺物(15)

No.	出土地点	部位	特　　徴	登録No.	No.	出土地点	部位	特　　徴	登録No.
1	P　4	口縁部	外面：交互刺突文・RL縄文・ナデ(横位)，内面：ナデ(横位)	1住－83	4	2　層	頸部	外面：RL縄文・ナデ(横位)，内面：ナデ(横位)	1住－86
2	1　層	胴　部	外面：RL縄文，内面：ナデ（横位）	1住－84	5	3　〃	胴部	外面：LR縄文・ナデ(横位)，内面：ナデ(横位)	1住－87
3	3　〃	〃	外面：LR縄文，内面：ナデ（横位）	1住－85					

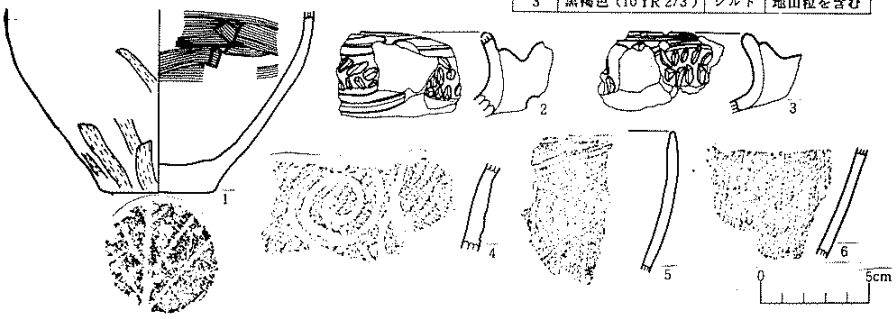
第20図　第1号住居跡出土遺物(16)



(単位：cm)

P 1	P 2	P 3	P 4
21	19	29	20

層No.	土　　色	土 性	備　　考
1	黒　色（10YR 2/1）	シルト	炭化物を含む
2	黒褐色（10YR 2/2）	シルト	
3	黒褐色（10YR 2/3）	シルト	地山粒を含む



No.	器　種	層位	特　　徴	底径	登録No.	No.	器　種	層位	特　　徴	登録No.
1	土師器　壺	1層	外面：ハラケズリ，内面：横位ハラナデ，底部，横痕	5.1cm	2住－1	4	縄文土器 深鉢	1層	外面：RL縄文（縦位），渦巻文	2住－4
2	縄文土器 深鉢	〃	外面：渦巻文，交互刺突文，内面：横位ナデ		2住－2	5	〃　〃	〃	外面：梯目状沈線，内面：ナデ	2住－5
3	〃　〃	〃	外面：交互刺突文，内面：横位ナデ		2住－3	6	〃　〃	〃	外面：梯目状沈線，内面：ナデ	2住－6

第21図　第2号住居跡と出土遺物

（2）第２号住居跡（第21図）

〔位置〕AM～AO－15・16区

〔平面形・規模〕長軸約4.9m，短軸約4.3mのほぼ正方形である。

〔壁〕地山を壁としている。ほぼ垂直に立ち上がり，残存している壁高は住居跡北側で約40㎝南側で約30㎝である。

〔床面〕ローム層を床面としている。小規模な凹凸が床面全体にある。

〔柱穴〕ピットは床面から４個(P_1～P_4)検出された。これらは，配置のあり方や対応関係からすべて柱穴と考えられる。柱間は東西(P_1－P_3・P_2－P_4)が約2.1m，南北(P_1－P_2・P_3－P_4)が約2.4mである。

〔堆積土〕住居跡内堆積土は３層からなっている。第１層は炭化物を含み，住居跡中央部に浅く堆積している。第２層は住居跡全体に厚く堆積している。第３層は地山粒を含み床面全体を覆っている。

〔出土遺物〕堆積土の第１層から，縄文土器・土師器が出土している。第２・３層及び床面からの出土遺物はない。

土師器

甕（第21図１）

体部下半率がほぼ直線的に外傾する底部破片資料である。全体的に剥落しているが，外面にヘラケズリ，内面にヘラナデが施されている。底部には木葉痕が認められる。また，外面に刷毛目の後にナデ，内面にナデとヘラナデが施され輪積み痕が認められる体部資料が出土している。

縄文土器（第21図２～６）

２と３は内弯する口縁部の突起資料である。２の突起の上面には沈線の渦巻文，２と３の頸部には隆沈によって区画された中に連続した２段の交互刺突文が施されている。また・内面には横位のナデが施されている。４は胴部資料である。縦位のＲＬ縄文が施文された後，沈線によって渦巻文が描かれている。これらの特徴は，黒川郡大和町勝負沢遺跡（丹羽・阿部・小野寺：1982）に類例がみられ，大木８ｂ式に比定されるものである。５は口縁部，６は胴部資料である。いずれにも不規則な櫛目状沈線が施され，内面にはナデがみられる。これらは，後期後葉に比定されるものである。

3．遺構以外の出土遺物（第22図）

１～５は，ＡＬ－14区ローム層上（地山面）の径約１mの範囲内からまとまって出土した。坏（１）は範囲内の西側に位置し口縁部から体部までの破片が残存していたが，その他は小さな破片で混在していた。

６～９もすべてローム層上から検出され，個別に出土した。

これらの遺物には，製作にロクロを使用していない土師器（１～６）と，ロクロを使用している土師器・赤焼土器・須恵器がある。

土師器

坏（１）

底部から丸味を持って立ち上がり体部で屈曲し，口縁部まで緩やかに外傾するものである。体部の屈曲する部分に対応する内面には稜がみられる。底部はやや窪み，底径の小さい平底である。また，内外面と底面には丁寧なヘラミガキが体部中央で横方向に，他は縦方向に施されている。

高坏（２）

脚部を欠くもので，坏部は丸味を持って外傾し口縁端部でやや直立気味になる。外面の口縁部にはナデ，他は縦方向のヘラミガキが施されている。内面には口縁部で横方向，体部で縦方向の丁寧なヘラミガキが施され，一部にヘラミガキの前段階の調整である刷毛目が残っている。

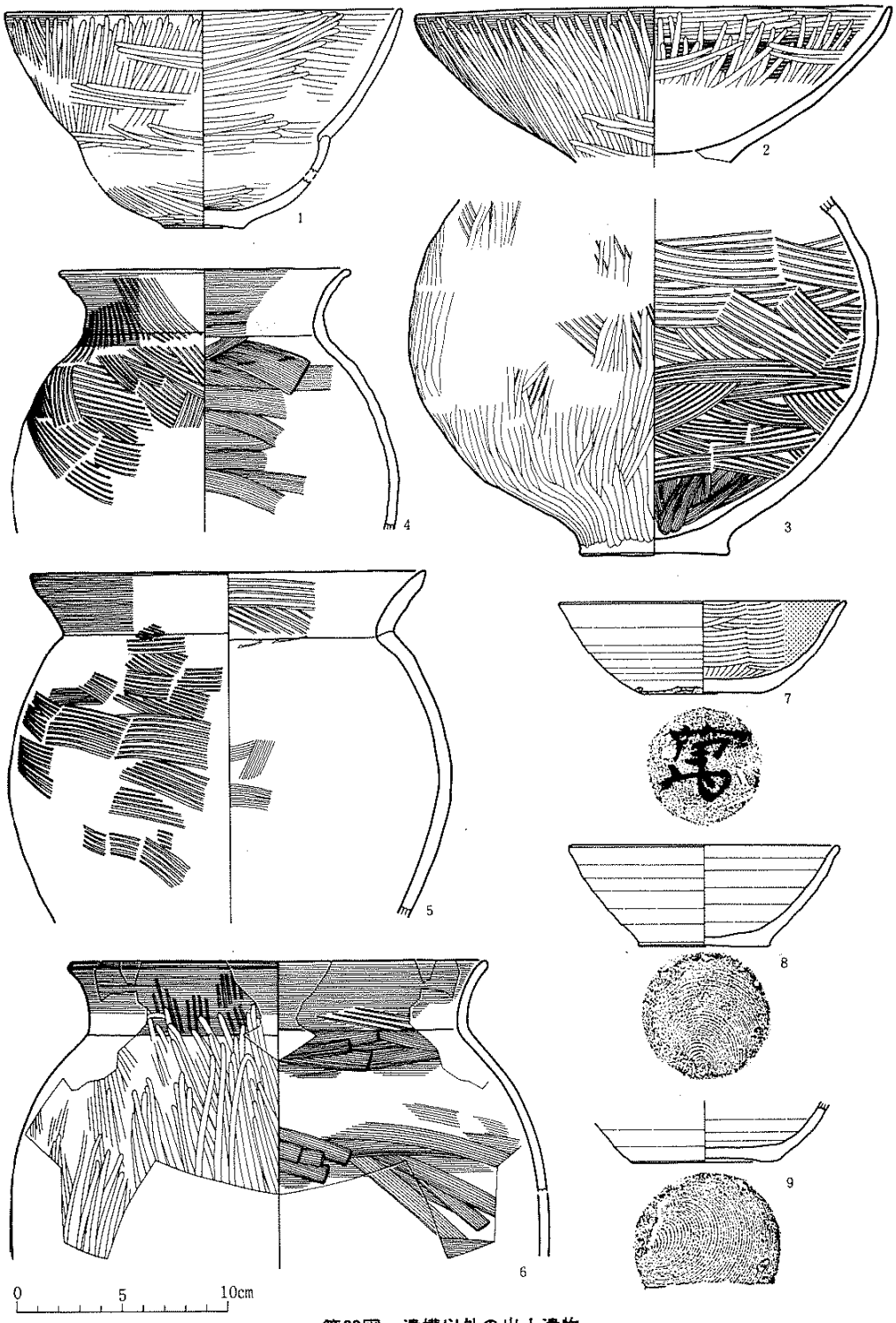
壺（３）

口頸部を欠き体部は球形をなすものである。底部は平底で下につき出すような形をしている。最大径は体部中央にある。外面には刷毛目の後縦方向のヘラミガキ，内面には刷毛目，また，内面の底部近くにはナデがそれぞれ施されている。

甕（４・５・６）

すべて底部を欠いている。４の体部は丸味を持って立ち上がり，口頸部は「く」の字状にくびれている。口縁端部はふくらみを持っている。体部の外面には刷毛目，口縁部には横ナデ，体部の内面にはヘラナデ・口縁部には横ナデがそれぞれ施されている。また，最大径は体部にある。５の体部は全体的に丸味を持ち，口縁部は外反する。口縁端部は細くなる。体部の外面には刷毛目，口縁部には横ナデ，体部の内面にはヘラナデ，口縁部には刷毛目が施されている。６の体部は緩やかに丸味を持って立ち上がり，口縁部はやや外反している。口縁端部は丸くなっている。口縁部の外面には刷毛目の後横ナデが施され，その後体部にかけてヘラミガキが施されている。体部の内面にはヘラナデが施され，口縁部では横ナデの後，部分的に刷毛目が施されている。

坏（７）



第22図　遺構以外の出土遺物

（単位：cm）

No.	器種	地点	外面	内面	口径	底径	器高	登録No.
1	土師器 坏	AL−14	ヨコナデ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	18.6	3.6	(10.3)	AL・14−1
2	〃 高坏	〃	ヨコナデ→ヘラミガキ	刷毛目→ヘラミガキ	22.5			AL・14−2
3	〃 壺	〃	刷毛目→ヘラミガキ	ナデツケ・刷毛目		6.9		AL・14−3
4	〃 甕	〃	刷毛目→ヨコナデ	ヘラナデ・ヨコナデ	13.6			AL・14−4
5	〃 〃	〃	刷毛目→ヨコナデ	ヘラナデ・刷毛目	18.6			AL・14−5
6	〃 〃	AL−13	刷毛目→ヨコナデ→ヘラミガキ	ヘラナデ・刷毛目→ヨコナデ	19.5			AL・13
7	〃 坏	AD−49	ロクロナデ，体部下端〜底部：手持ちヘラケズリ，「萬」の墨書有り	ヘラミガキ・黒色処理	(13.4)	5.5	4.4	AD・49
8	赤焼土器 坏	AD−21	ロクロナデ，底部：回転糸切り	ロクロナデ	(12.6)	6.1	4.8	AD・21
9	須恵器 坏	x	ロクロナデ，底部：回転糸切り	ロクロナデ		7.0		x

製作にロクロを使用している。体部は丸味を持って立ち上がり口縁部はやや外反する。外面には底部全面と体部下端に手持ちヘラケズリ，内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。底面に「萬」の墨書がある。

赤焼土器

坏（8）

底部から直線的に立ち上がり口縁部は弱く外反する。底部の切り離しは回転糸切りで再調整はない。

須恵器

坏（9）

体部上半を欠く。底部の切り離しは回転糸切りで再調整はない。

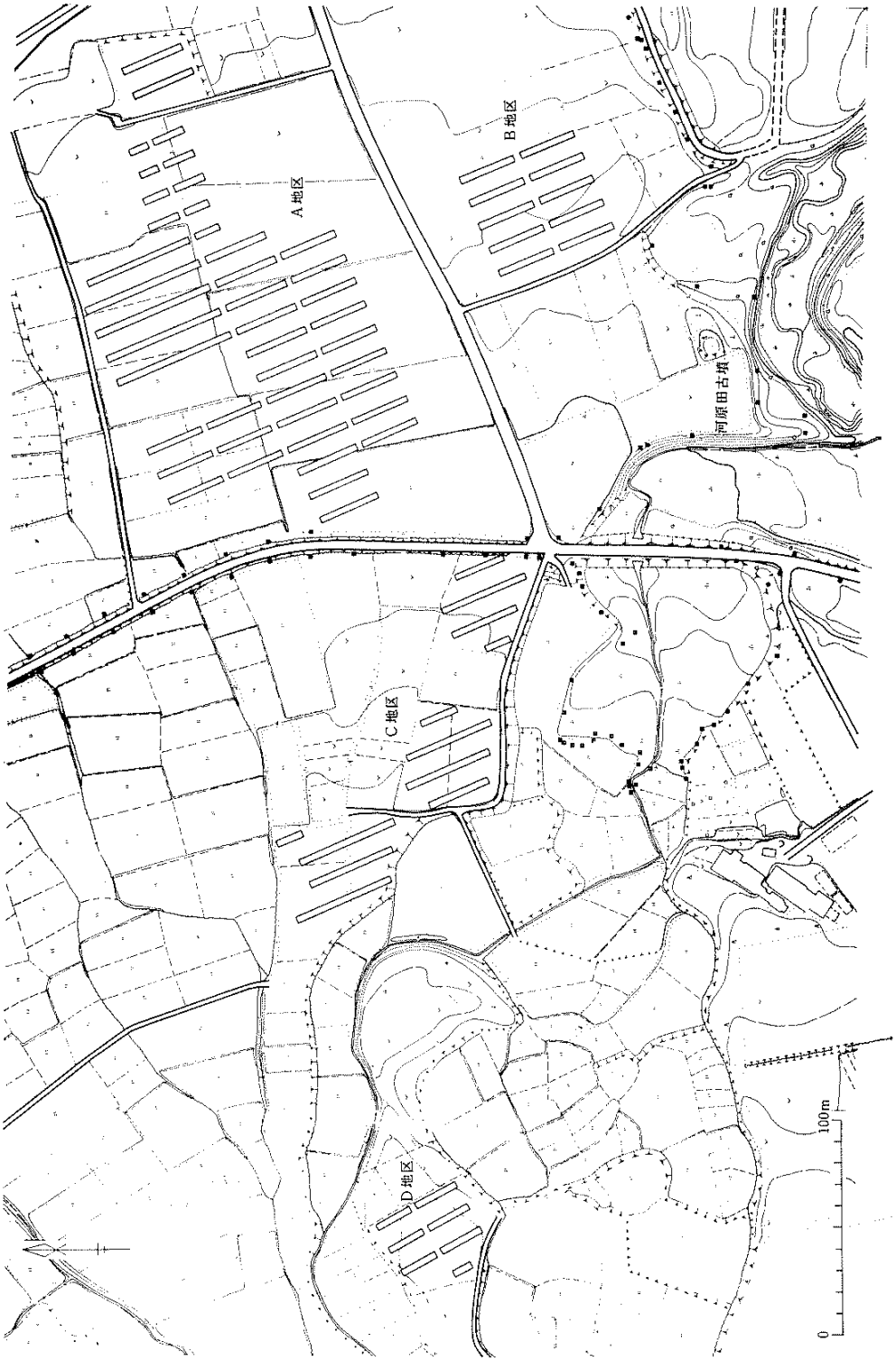
出土遺物の年代について

ＡＬ−14 区からまとまって出土した土師器坏・高坏・壺・甕は，前述したそれぞれの器形と技法から，刈田郡蔵王町大橋遺跡出土遺物（太田：1980），宮前遺跡A群土器（前掲：丹羽）と類似している。これらは東北地方南部における土師器編年塩釜式に比定されるものである（前掲：氏家）。また，大橋遺跡は塩釜式でも初期の頃と考えられており，年代は４Ｃ項とされている。

ＡＬ−13 区から出土した土師器甕（６）も器形と技法的特徴から，ＡＬ−14 区出土の遺物と同時期のものと考えられる。

その他，土師器（７）・赤焼土器（８）・須恵器（９）の各坏は，それぞれの器形的特徴や技法的特徴が第１号住居跡出土のものと類似しており，第１号住居跡出土遺物と同時期のものと考えられる。

河原田遺跡



第１図　河原田遺跡グリッド配置図

河原田遺跡（第１図）

1．基本層位

第１層は黒褐色の耕作土である。厚さは概ね約20～40㎝であるが，Ａ地区の中央部では沢状地形のため厚さは約50～80㎝と他の場所より深くなる。また，北側は削平のおよんでいる地域が多く，厚さは約10～20㎝である。

第２層は黄褐色のローム層(地山)であるが，沢状地形ではローム漸層移層が部分的に確認される。

2．出土遺物

河原田遺跡で遺構は検出されなかった。遺物は縄文土器・土師器・須恵器・石器が出土している。しかし，遺物量はごく僅かで摩滅したものが多く，以下，出土した遺物の中で文様が明確なものや特徴的な部位に限り説明する。

縄文土器（第２図）

１は口縁部資料，他はすべて胴部資料で，これらはD地区より出土したものである。

１は口縁端部と口縁上面に貝殻腹縁刺突による刺突文帯をもち，外面に貝殻条痕文が施されている。内面には横位のナデが見られる。胎土に繊維を含んでいない。

２は外面に微隆起線文の施されるものである。また，内外面に貝殻条痕文がみられる。これらの特徴をもつものは，早期後半に位置づけられるものである。

その他３～８は，内外面に貝殻条痕文が施される条痕文土器である。

土師器

すべて破片資料で実測できなかったが，坏と考えられるものは，外面にロクロナデ，内面にヘラミガキ・黒色処理が認められ，表杉ノ入式に比定されるものである。

須恵器

外面に平行タタキが認められる甕の体部資料が出土している。

石器（第３図）

１・２は石錐である。

１はつまみ部を有するもので，つまみ部から錐部へ緩やかに移行している。縦長剥片を素材としており，背腹面とも入念な調整剥離が施されている。錐部先端は欠損している。

２は断面が三角形の両面加工石器である。２次加工は粗く，階段状剥離がめだつ。先端部は著しく摩滅している。

３は両面に加工されているが両端は欠損しており，形態は不明である。破損部分に２次加工

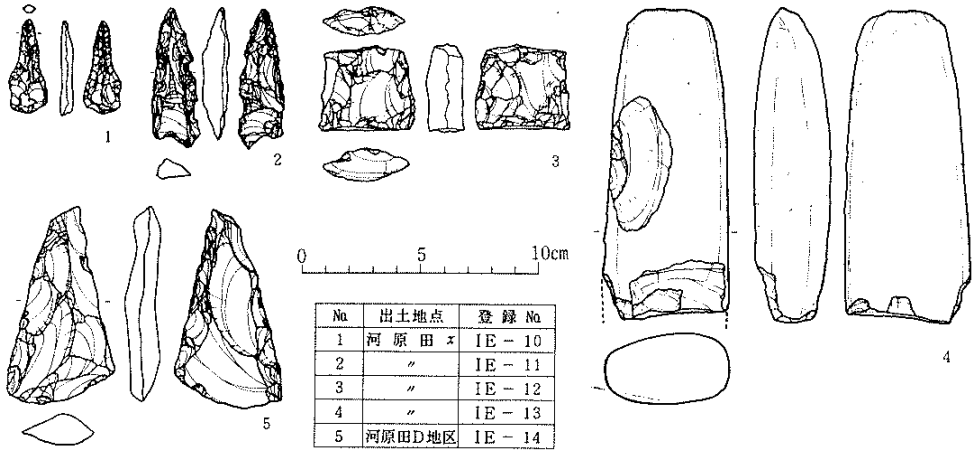
がされている。

４は両面加工の石器で，平面形は不整な三角形である。横長剥片を素材としており，刃部と思われる部分には，素材の剥片の縁辺がそのまま残されている。

５は磨製石斧である。刃部は破損しており，また，全体的に著しく摩滅している。

No.	出土地点	部位	特徴	登録No.	No.	出土地点	部位	特徴	登録No.
1	河原田Ｄ地区	口縁部	外面：貝殻腹縁刺突，貝殻条痕文　内面：横位ナデ	ＩＥ－１	5	河原田Ｄ地区	胴部	内外面：貝殻条痕文	ＩＥ－５
2	〃	胴部	外面：微隆起線文　内外面：貝殻条痕文	ＩＥ－２	6	〃	〃	〃	ＩＥ－６
3	〃	〃	内外面：貝殻条痕文	ＩＥ－３	7	〃	〃	〃	ＩＥ－７
4	〃	〃	〃	ＩＥ－４	8	〃	〃	〃	ＩＥ－８

第２図　河原田遺跡出土遺物（土器）



No.	出土地点	登録No.
1	河原田ｘ	ＩＥ－10
2	〃	ＩＥ－11
3	〃	ＩＥ－12
4	〃	ＩＥ－13
5	河原田Ｄ地区	ＩＥ－14

第３図　河原田遺跡出土遺物（石器）

V．考　　察

二本松遺跡

1．第１号住居跡出土遺物の年代と問題点

第１号住居跡出土遺物には，弥生土器・土師器・赤焼土器・須恵器・灰釉土器・鉄製品がある。これらの中で弥生土器は第１号住居跡に伴うものではなく，時期については既述してある。

第１号住居跡出土遺物は，床面・カマド・貯蔵穴状ピット出土のものが住居跡に伴うものである。また，堆積土から出土の土師器・須恵器は床面・カマド・貯蔵穴状ピット出土のものと器形や技法が同様であり，ここではこれらを一括して説明していく。

以下，坏類を中心に他の遺跡の出土遺物と比較して第１号住居跡出土遺物の年代について検討してみる。

第１号住居跡出土の土師器坏は製作にロクロを使用していることから，東北地方南部における土師器編年の表杉ノ入式（氏家：1957）に比定されるものである。

第１号住居跡出土の土師器坏のように体部が丸味を持って立ち上がり，口縁部が外反するかやや直線的であるものは表杉ノ入式期に比定される県南の遺跡で比較すると，刈田郡蔵王町東山遺跡土器溜出土遺物（真山：1981）と白石市家老内遺跡第２号住居跡出土遺物（真山：1981）に類例がある。

よって，坏類に関して本遺跡と東山・家老内両遺跡と比較検討してみる。

東山遺跡：土師器坏は本遺跡のものと類似する器形の他に，体部から口縁部までほぼ直線的に外傾し器高が高く鉢状をなしているものがある。技法的特徴としては，底部の切り離しが回転糸切りで再調整のないものと，回転または手持ちヘラケズリが施され切り離しが不明なものとがある。これらは本遺跡出土の土師器坏にもみられる技法で，それぞれの技法が全体に占める割合は東山遺跡と近似している（表１）。ただし，東山遺跡の回転ヘラケズリの施されている器形は鉢状のものに多くみられる。また，回転ヘラケズリは割合に広く施されているが，本遺跡のものは回転ヘラケズリの施されている範囲が狭い。

赤焼土器坏の器形は本遺跡と全く異なるものである。

須恵器坏は体部が丸味を持って立ち上がるものと，体部から口縁部までほぼ直線的に外傾するものとがある。本遺跡の須恵器坏とは体部が丸味を持つという点で類例しているが，口縁部

技法／遺跡	回転糸切り・再調整なし	回転糸切り＋回転ヘラケズリ	回転糸切り＋手持ちヘラケズリ	切り離し不明・回転ヘラケズリ	切り離し不明・手持ちヘラケズリ
東山遺跡土器溜	11	4	15	6	25
家老内遺跡２住	6		4		7
二本松遺跡１住	8	1	5	3	6

表１　土師器坏の底部切り離し技法と再調整

で外反するものが少ない点で異なる。また，底径が大きく器高が低い皿状のものも出土しているが，本遺跡ではみられない器形である。技法的特徴としては，底部の切り離しがヘラ切り・回転糸切りで再調整のないものと，回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリが施されているものがある。本遺跡の須恵器坏は，すべて底部の切り離しが回転糸切りで再調整のないものである。

家老内遺跡：土師器坏は本遺跡出土坏の器形とほぼ類似しているが，底径は本遺跡のものより小さく，その分体部の丸味がいくらか強くなっている。技法的特徴は底部の切り離しが回転糸切りで再調整のないものと，手持ちヘラケズリが施されているものとがある。回転ヘラケズリの施されているものはない（表１）。

赤焼土器坏は第２号住居跡からは出土していない。他は底部破片資料で，全体の器形は不明である。

須恵器坏はすべて破片資料であり全体の器形は不明であるが，底部の切り離しはすべて回転糸切りで再調整のないものである。

以上のことから，本遺跡第１号住居跡出土の土師器坏は器形的には家老内遺跡出土のものに，技法的には東山遺跡出土のものにそれぞれ類似するものと考えられる。また，須恵器坏の器形的特徴は東山遺跡出土の中に類似するものがみられ，技法的特徴は家老内遺跡出土のものと同様である。

よって，本遺跡出土の土師器坏や須恵器坏は，東山遺跡と家老内遺跡のいずれにも類似する要素を持つものと考えられる。この両遺跡出土の遺物の年代については，東山遺跡が９Ｃ中葉，家老内遺跡は東山遺跡に後続するもので（丹羽：1983），時期差は小さい。

したがって，本遺跡第１号住居跡出土の土師器坏と須恵器坏は，９Ｃ中葉以降９Ｃ後半頃の遺物であると考えられる。土師器，須恵器の他の器種や他の遺物も同様である。

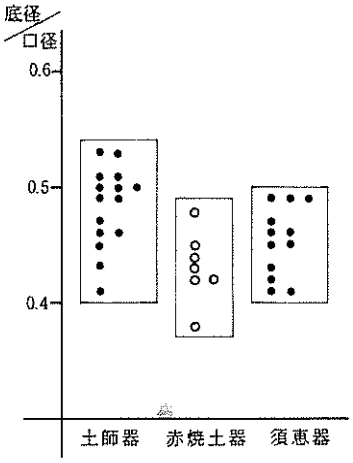


表２　坏の口径底径比
（第１号住居跡出土）

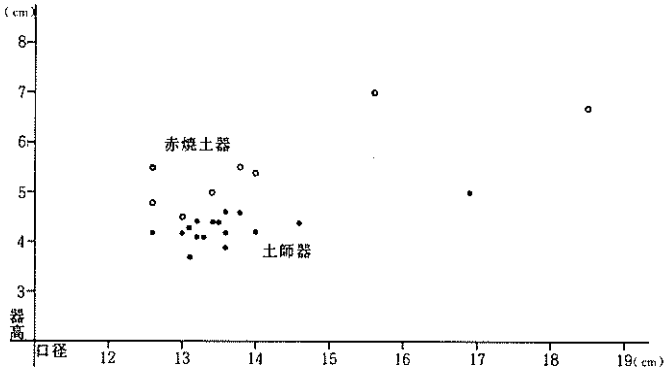


表３　口径値と器高値（第１号住居跡出土）

他に年代を比定できる遺物として灰釉陶器椀がある。これは前述した特徴から，黒笹 14 号窯式・黒笹 90 号窯式に相当するものである。これらの窯式の年代は，９Ｃ後葉から 10Ｃ後半とされ（斎藤：1982），県内の土師器の推定年代とズレがみられる。

次に赤焼土器について若干検討してみる。

第１号住居跡出土の赤焼土器坏は，すべて製作にロクロを使用し底部の切り離しは回転糸切りであるが，内面にヘラミガキ・黒色処理の施されていないものと，内面にヘラミガキ，底部周縁にナデが施されているものとがある。赤焼土器坏は技法的特徴として２つに分かれるが，器形的には全く同一である。これらを前述の東山・家老内両遺跡の赤焼土器坏と比較すると，器形は大きく異なっている。また，東山・家老内両遺跡ではヘラミガキ・黒色処理・ナデ等は一切認められない。なお，小形皿は両遺跡ともに出土していない。

県内において「赤焼土器」と称されているものは，上新田遺跡（小井川：1981）・宮前遺跡（前掲：丹羽）や鹿島・竹之内遺跡（佐々木：1984）・植田前遺跡（加藤：1981）などでみられるように９Ｃ初頭から12Ｃ頃までの平安時代全般の遺跡から出土している。

赤焼土器に関しては東北の各県において名称や規定の統一性がなく，出現年代等をめぐる見解も様々である（小井川：1984）。これらの状況の中で共通点としてあげられることに（１）酸化炎焼成を意図していること，（２）内面にヘラミガキ・黒色処理が施されていないこと，（３）須恵器の供給減に対して赤焼土器が増加し，遂には土師器・須恵器を凌駕することがある。また，器形的には赤焼土器は共伴する土師器や須恵器に類似性がみられることがあげられる。

しかし，第１号住居跡出土の赤焼土器坏には，前述したように内面にヘラミガキが施されているものも含めてある。それは，底部の切り離しが回転糸切りで内面にヘラミガキ・黒色処理が施されていない，いわゆる赤焼土器坏の器形・胎土と差異は認められず，また，土師器坏とは大きく異なっているからである。

ただし，今回本遺跡で規定した赤焼土器の特徴が地域的なものか，または時間的なものかについては，精査した平安時代の住居跡が一軒だけであり十分な検討ができなかった。その中でも，器形的には山形県の庄内地方や山形市境田遺跡（渋谷：1982・1984）出土の赤焼土器と類似していると考えられる。また，赤焼土器は量的には第１号住居跡出土遺物の年代である９Ｃ後半頃から急速に減少する傾向があるとされているが（前掲：丹羽），本遺跡の場合，出土量は比較的多く他の遺跡と様相を異にしている。

年代については，共伴する土師器や須恵器から他の遺物と同様に９Ｃ後半頃に位置づけられることから，本遺跡周辺や同時期の赤焼土器の類似した資料の増加を待ちたいと考える。

2．遺構について

第１号住居跡は長軸約8.4m，短軸約6.8mの大形住居跡である。同規模の住居跡は仙台周辺の平安時代の遺跡に限ると，名取市清水遺跡第18号住居跡（約8m×約6m）(丹羽・阿部：1981) 仙台市南小泉遺跡第1･3号住居跡(8.69m×6.67m･7.46m×6.48m)(渡辺：1983)等があり事例は極めて少ない。

本住居跡の特徴は，規模の大きさ以外に出土遺物の器種の豊富さ，量の多さという点にある。特に赤焼土器坏・須恵器坏・瓶等は県内において初めての器形であり，また，須恵器甕類が住居跡の北東中央部でまとまって出土していることなどは，これまでの調査された集落の住居跡の様相とは異なっている。

二本松遺跡において調査した平安時代の住居跡は一軒だけであり，集落内での位置づけは不可能であるが，出土遺物の内容から当時の農民より上層の階級の住居跡であると考えられる。

第２号住居跡は，遺物の出土状況から年代を比定することは困難であるが，破片資料とカマドが付設されていないことから，第１号住居跡よりかなり前の時期に属するものと考えられる。ただし，床面が凸凹であり住居として機能していたかについては不明である。

その他，調査区内から竪穴式住居跡・焼面・溝状遺構等が確認されたが，精査してないため詳細については不明である。

ただし，本遺跡の調査区東側で検出された第３号住居跡は，確認面からの遺物であるがAL－14区出土遺物の坏と類似するものがあり，古墳時代のものであると思われる。

今回の調査において精査された遺構は少なく，それをもって遺跡全体の性格を明確に把握することはできないが，確認された遺構の状況や出土した遺物等から，二本松遺跡は縄文時代中期頃から奈良・平安時代までの遺跡であると考えられる。

河原田遺跡

1．河原田遺跡について

河原田遺跡は前川左岸のほぼ平坦な段丘上に立地する。遺構確認調査の結果，遺構は発見されなかったが，大寺式(第２図－１)，素山上層式（第２図－３～８）（伊東：1957）に比定されると考えられる縄文土器片が出土している。

土師器・須恵器も若干の出土がみられ，土師器坏はその特徴から表杉ノ入式期のものと考えられる。

また，遺跡の中に河原田古墳があり，二本松遺跡と併わせこの地域一帯は，縄文時代から古代までの生活舞台になったことが考えられる。

Ⅵ　ま　と　め

1．二本松遺跡と河原田遺跡は，前川左岸の河岸段丘上に立地する。

2．二本松遺跡では11軒の竪穴住居跡を確認し，そのうち２軒の竪穴住居跡について精査を行った。

　発見された遺物は縄文時代の土器・弥生時代の土器，古墳時代の土師器，平安時代の土師器・須恵器・赤焼土器・灰釉陶器・鉄製品・炭化米である。この中で，平安時代の遺物がほとんどを占めている。

3．精査した竪穴住居跡の年代は　第１号住居跡が９Ｃ後半，第２号住居跡については不明である。

4．調査の結果，二本松遺跡は縄文時代中期から平安時代までの複合遺跡であることがわかった。また，遺構の確認状況から遺跡の範囲は調査区の北側には広がらず，段丘の縁辺や旧地形の微高地に沿って西側に延びるものである。

5．河原田遺跡は，遺跡の範囲と性格の確認調査を実施したが微高地上にその広がりがあることが判った。

　発見された遺物は縄文時代から平安時代までのもので，新たな遺構の発見はなかった。

6．河原田遺跡の大部分は，盛土等により保存されることになった。

引用・参考文献

阿部恵　　(1980)「宇賀崎貝塚」宮城県文化財調査報告書第67集　宮城県教育委員会

伊東信雄　(1957)「古代史ー縄文式文化の変遷」『宮城県史』1

氏家和典　(1957)「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

小川淳一　(1980)「青木遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅳ　宮城県文化財調査報告書第71集　宮城県教育委員会

黒川利司　(1981)「東足立遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅴ宮城県文化財調査報告書第81集　宮城県教育委員会

小井川和夫 (1981)　「上新田遺跡」宮城県文化財調査報告書第78集　宮城県教育委員会

(1984)「いわゆる赤焼土器について」『研究紀要』第10巻　東北歴史資料館

後藤勝彦　(1972)「Ⅰ考古資料」『川崎町史』史料編　川崎町史編纂委員会

(1975)「第一章　先史時代と古代」『川崎町史』通史編　川崎町史編纂委員会

後藤勝彦･ほか (1970)「下窪遺跡」『釜房ダム水没遺跡発掘調査概報』東北地方建設局

(1975)「川崎町中沢遺跡発掘調査報告」『川崎町史』別編　川崎町史編纂委員会

小徳晶　　(1982)「天神山遺跡」宮城県文化財調査報告書第89集　宮城県教育委員会

斎藤孝正　(1983)「愛知県古窯跡群分布調査報告」(Ⅲ)(尾北地区・三河地区)　愛知県教育委員会

佐々木和博 (1984)「鹿島遺跡・竹之内遺跡」　宮城県文化財調査報告書第101集　宮城県教育委員会

佐藤和彦　(1982)「小梁川遺跡出土の漆紙文書」『小梁川・小梁川東遺跡現地説明会資料』宮城県教育委員会，建設省東北地方建設局七ヶ宿ダム工事事務所

渋谷孝雄　(1982)「境田C遺跡」　山形県埋蔵文化財調査報告書第62集　山形県教育委員会

(1984)「境田C'・D遺跡」　〃　第76集　〃

田中則和・主浜光朗・佐藤甲二 (1984)「山口遺跡Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第61集

田村俊和　(1984)「Ⅱ　釜房湖県自然環境保全地域の地形地質」『釜房湖県自然環境保全地地学術調査報告書」釜房湖県自然環境保全地域学術調査委員会編

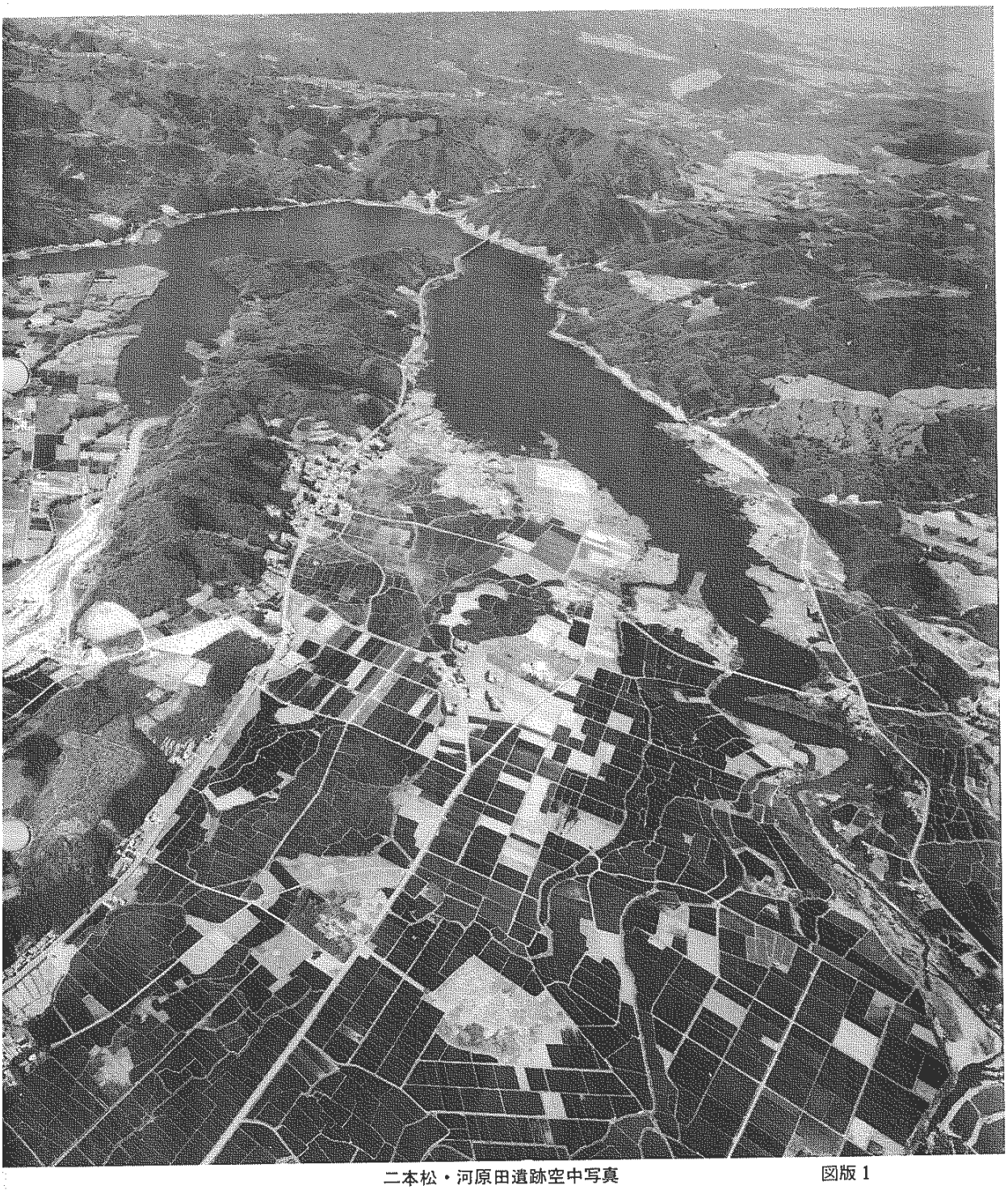
土岐山武　(1980)「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』Ⅳ　宮城県文化財調査報告書第72集　宮城県教育委員会

楢崎彰一・斉藤孝正 (1981)「猿股窯編年の再検討について」『研究紀要』2　愛知県陶磁資料館　P・P53～71

丹後茂・小野寺祥一郎・阿部博志 (1981)「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』Ⅴ

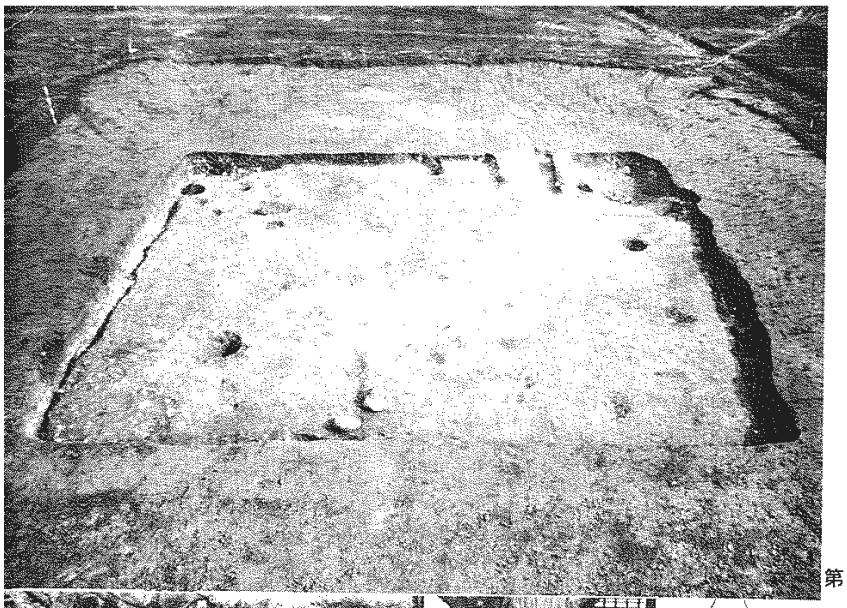
宮城県文化財調査報告書第 77 集　宮城県教育委員会
丹羽茂　（1983）「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集　宮城県教育委員会
平川南・後藤勝彦・白鳥良一（1980）「宮城県下窪遺跡の漆紙文書」『研究紀要』Ⅶ　宮城県
前川要　（1984）「猿股窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『研究紀要』Ⅲ　瀬戸市歴史民俗資料館
真山悟　（1981）「家老内遺跡」「東山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅴ　宮城県文化財調査報告書第81集　宮城県教育委員会
宮城県教育委員会　（1981）「宮城県遺跡地図・宮城県遺跡地名表」宮城県文化財調査報告書第73集
茂木好光　（1984）「大谷地遺跡」『宮城県営圃場整備等関連　遺跡詳細分布調査報告書』宮城県文化財調査報告書第100集　宮城県教育委員会
森貢喜　（1982）「水入遺跡」宮城県文化財調査報告書第84集　宮城県教育委員会
（1983）「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅷ　宮城県文化財調査報告書第93集　宮城県教育委員会
吉田恵二　（1982）「緑釉陶と灰釉陶との相関関係とその編年について」『考古学ジャーナル』№211
渡部弘美　（1983）「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書第55集　仙台市教育委員会
亘理梧郎　（1975）「第一章　先史時代と古代」『川崎町史』通史編　川崎町史編纂委員会
亘理真次　（1975）「序章　自然環境」『川崎町史』通史編　川崎町史編纂委員会

写　真　図　版



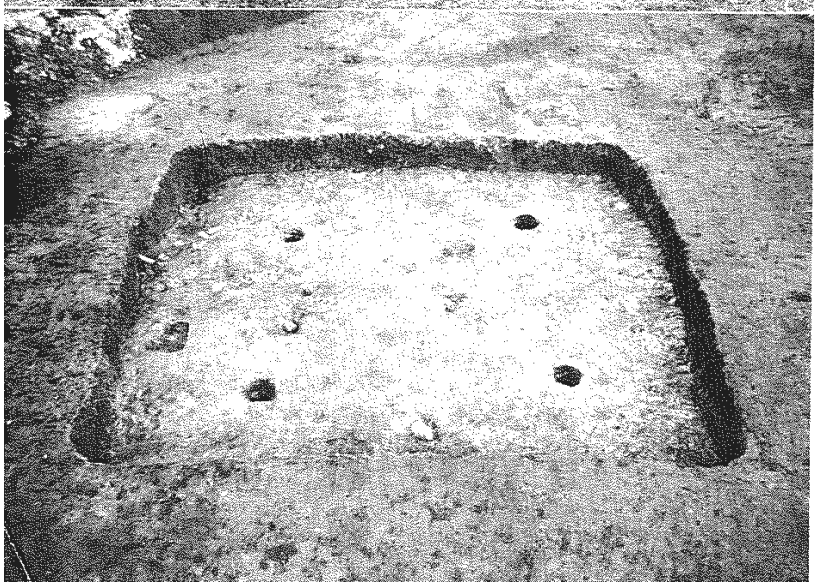
二本松・河原田遺跡空中写真　　図版 1

図版 2



第 1 号住居跡（西方より）

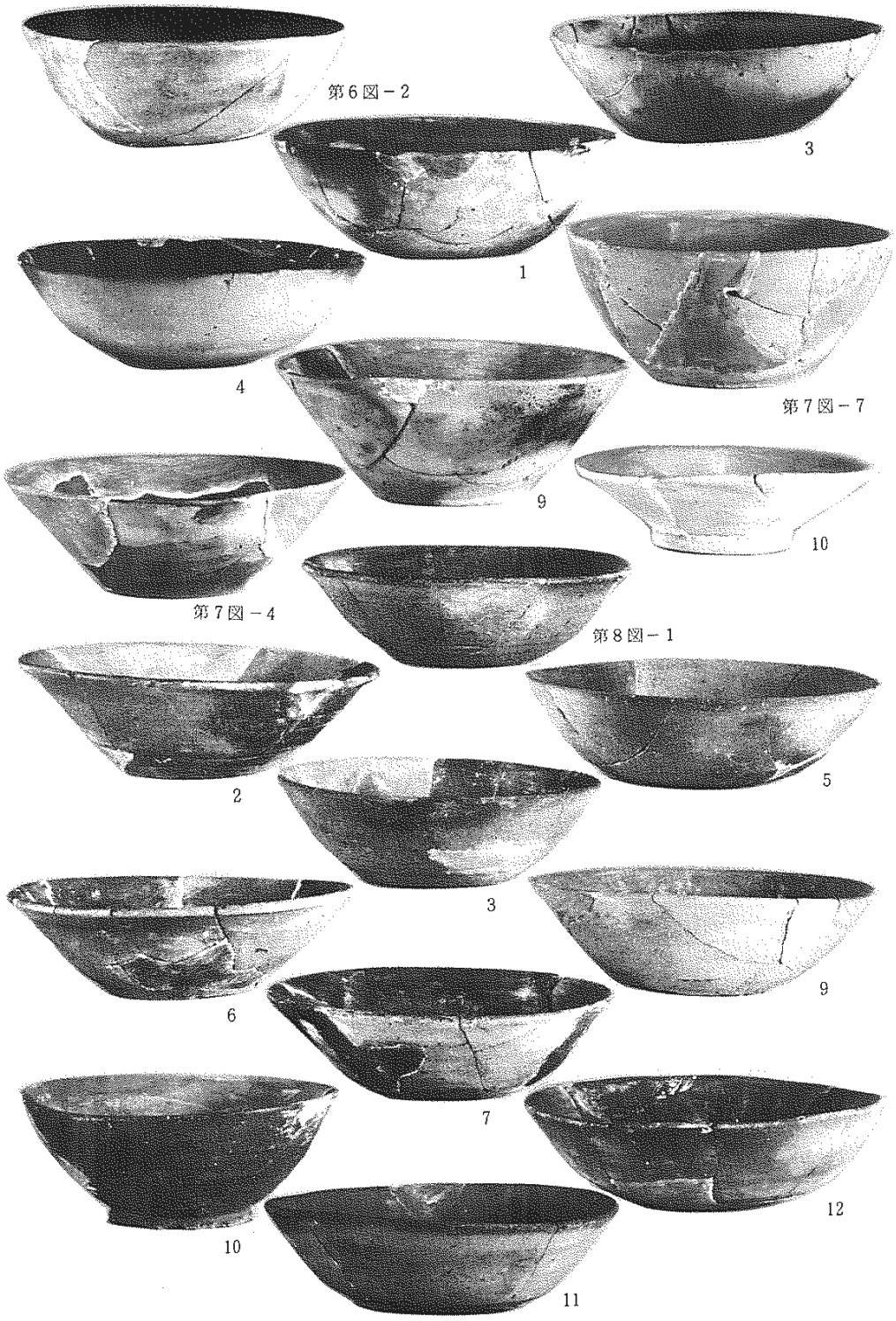
第 1 号住居跡出土遺物（復元）



第 2 号住居跡（西方より）

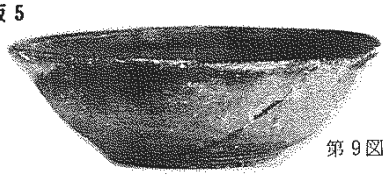
図版 3

第1号住居跡出土遺物1

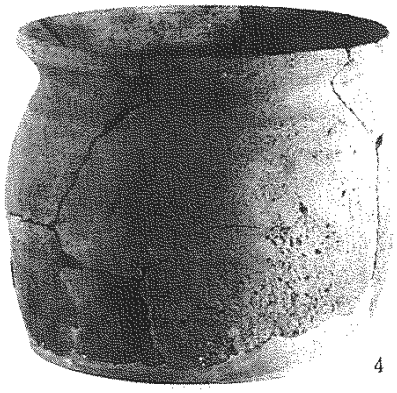


第1号住居跡出土遺物 2

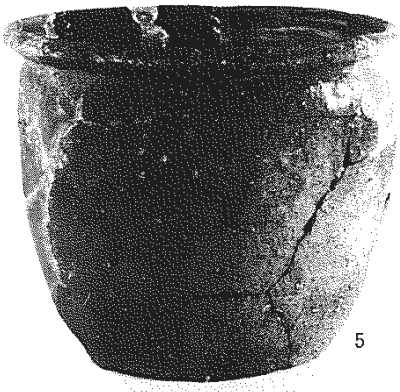
図版 5



第 9 図－1



4



5

3

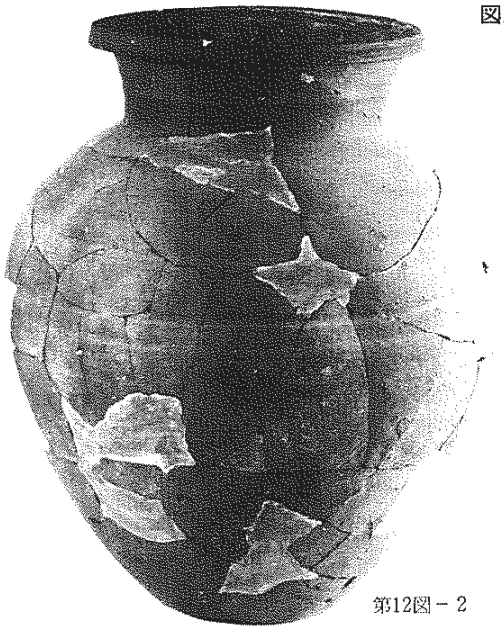
第10図 1

第11図－3

2

第 1 号住居跡出土遺物 3

第12図－1



第12図－2

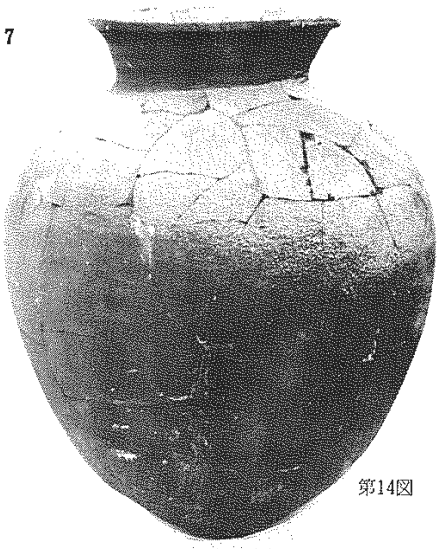
第13図－2

第13図－1

第19図－1

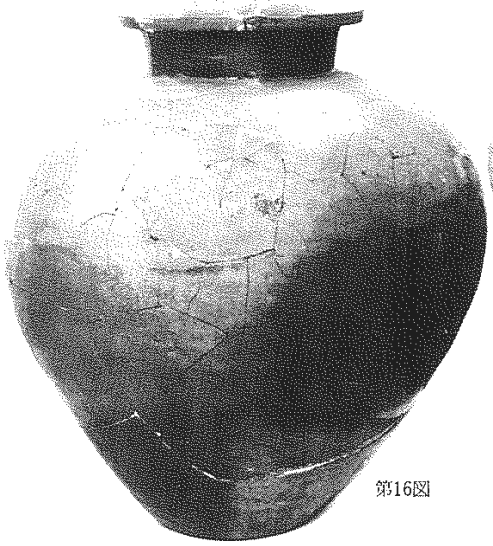
第 1 号住居跡出土遺物 4

図版 7



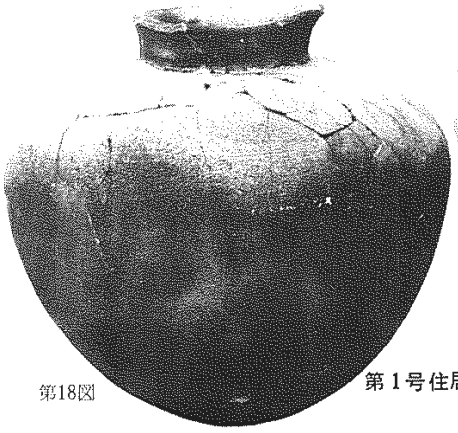
第14図

第15図

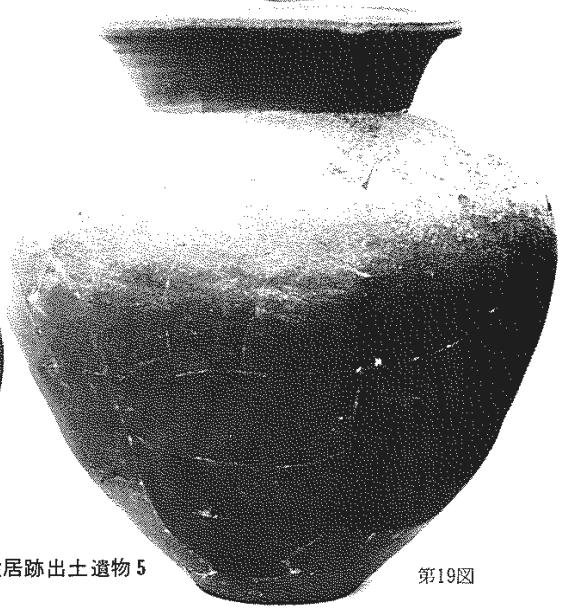


第16図

第17図



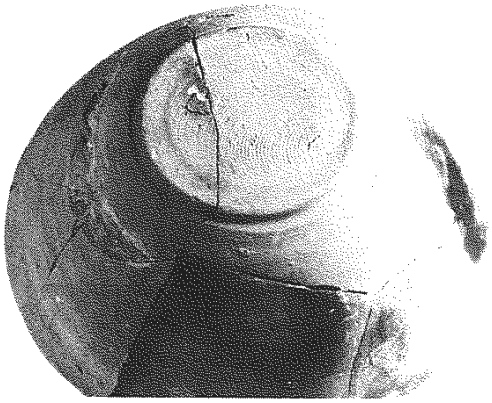
第18図



第19図

第 1 号住居跡出土遺物 5

第5図－10

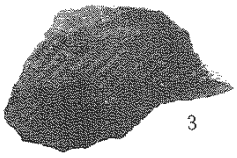


第7図－5

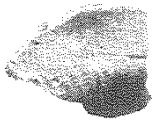
第1号住居跡出土遺物6

第20図－1

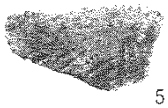
2



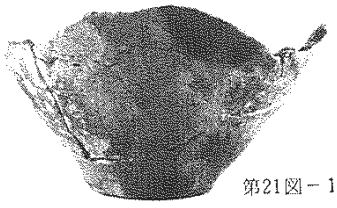
3



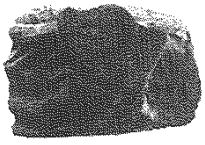
4



5

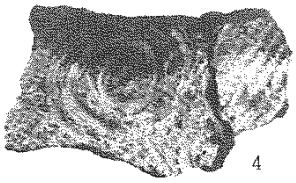


第21図－1



2

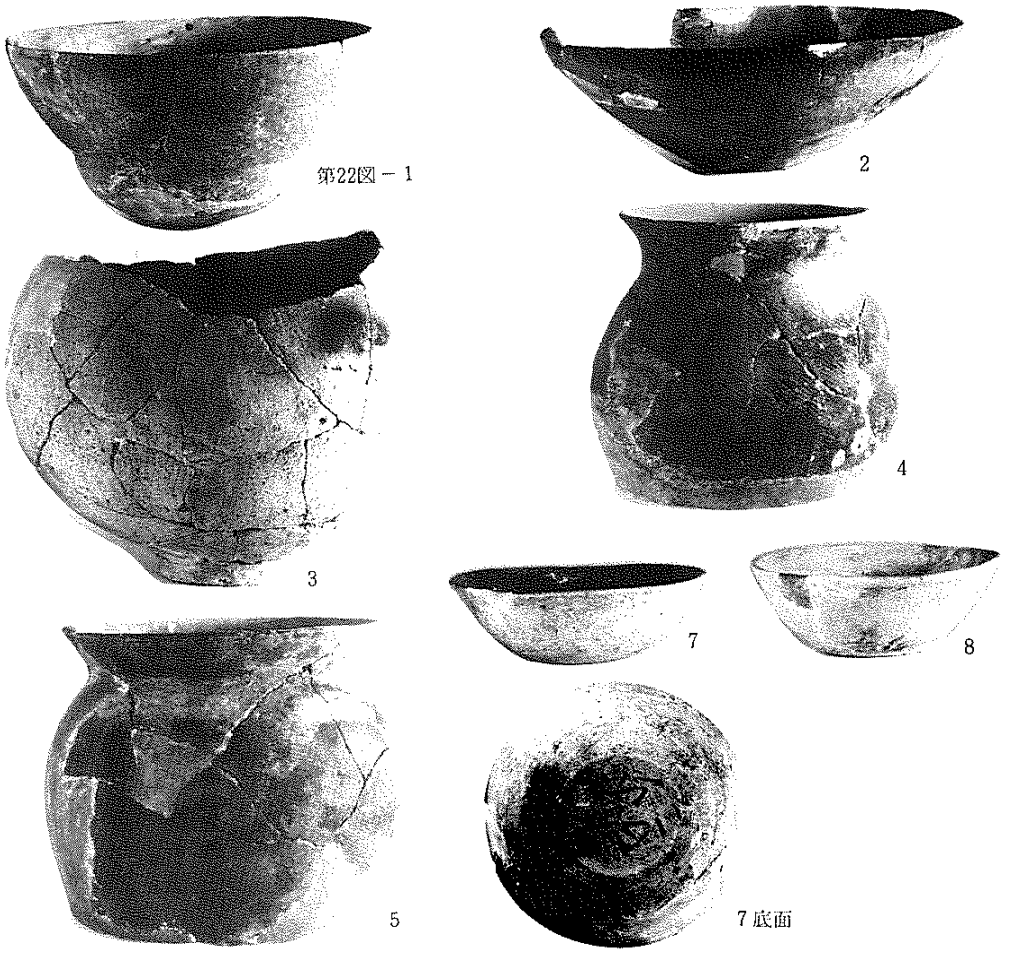
3

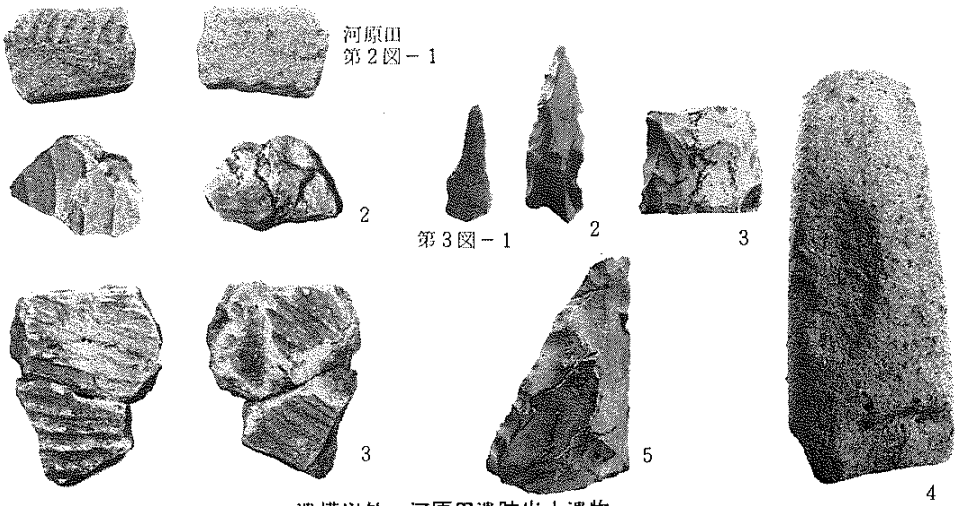


4

第2号住居跡出土遺物

図版 9





遺構以外・河原田遺跡出土遺物